に埃及模様のある單衣帶をきちんと締て、やつぱり黑い傘をさしてゐた。
處が其の若い方が、何うしてもお信らしいので、竹村ははつと思つて、目をそらした。別に先方がこつちに氣がついただけではなく、距離も可也遠いのであつたが、何となく心が咎めるやうに思つたのであつた。
二人の女も地曳を見やうとしてこつちへ遣つて來た。竹村は、傘が邪魔になつてその一人が誰であるかは明瞭判らなかつたが、一人の方は何うもお信に違ひないらしいので、目につかないやうにと、少し退つて、人々の蔭へ隱れてゐたが、正一は地曳に見恍れて、段々前の方へ出て行つた。彼は二人の女には氣もつかない風であつた。
竹村はずつと此方の方にある、夏中海水浴に來る人たちの休憩所になつてゐた茣蓙張のなかへ入つて、椅子に腰かけて莨を喫しながら、其の方を見て見ぬふりをしてゐたが、旋て正一がお信に見つかつたらしく、側へ寄つて何か話をしてゐた。そして其と同時に、正一もお信も、四邊を見廻して竹村を搜してゐるらしかつた。ふと氣がついてみると一方の年增は何う見ても

辰子に違ひないと思はれた。
竹村はお信の主人が、辰子であらうなどゝは、想像もしなかつたが、ふと心に浮んだのは、『の裁判事件であつた。彼等は何等か偶然の出來事で知合になつて、それでお信の口から、あ一忌まはしい田代の罪惡が、辰子側の耳へも入ることになつたに違ひないと云ふ感じが、直頭へ來た。
辰子とお信は、正一の前に立つて連に何か話してゐるらしかつた正一は始終悲しげに俛いてゐた。
すると其時、お信だけが正一の傍を離れて、竹村のゐる方を目がけて、そろ〳〵遣つて來た。
『困つたことになつた！』竹村は心に思ひながら素知らぬ顏でじつとしてゐると、お信の姿が段々近よつて來て、間もなく傍へ寄つて來た。
『こんな處に獨り何していらつしやいますの。』お信はパラソルを疊んで、中へ入つて來た。

竹村は爲うこゝなし苦笑してゐたが、お信の顔容は、昨日八幡で逢つた時よりは、一層綺麗に見ゐた。

扮裝が女學生風であゐからでもあつたが、綠色の帶などがよく體に移つて、鬚の毛の少し素れかゝつた目のあたりが、ひどく…艶にみゐた。手や足も濱の明ゐい光線で見ると、一層滑らかに白かつた。こんな顔をして、子供を產んだのだと思ふと不思議なやうな氣がした。

竹村は心に輕蔑してゐながらも現在彼女の姿を見ると、何となし一種の惱しさを感ずるのであつたそれは美しい魅力のある肉體から來る、壓迫に過なかつたが、彼もまだ年が若かつた。

『またお目にかゝりましたわね』お信はさう言つて、紅い顔をして莞笑した。

五

『さうね』と、竹村は冷やかに薄笑ひをしてゐるので、お信はちよつと泪ゆたやうな風で、默つて了つたが、暫くしてから、媚びるやうに、

『今日事によると、私貴方のお宿へお邪魔に出やうかと思つてゐたとこよ。』

そしてお信は袂から彌生を取出して、一本抜くと、

『御免なさいよ。點さして頂戴ね』と言つて、竹村が手にもつてゐる煙草を取つて、火をつけた。

その調子が、いかにも男狎れた女工らしいところがあるので、竹村は不快を感じた。

お信はそんなことには氣がつかず莨を喫しながら、

『私昨日御主人と一緒だと云ふ話をしたでせう。それも少し譯があつて、連れられて來たんですけれど、その人が今あすこへ來てゐるのよ。誰だか判つたでせう。』

お信はさう言つて、さすがに紅い顔をして竹村の顔色を覗いた。

『判らんこともないね。竹村は苦笑した。

『私あの人と溫泉で逢つたのよ。梅の湯と云ふ家御存じ？あすこが私の親類だもんだから、私が體がわるくて、入湯かた〴〵手傳ひに行つてゐると、あの方がお客で來ましたの。それにつ

いては、私ほんとうに貴方に濟まないことがあるんですの。』
竹村は愈てつきり然うだと云ふ氣がした。
『わたしあの方が渡瀬さんの舊夫人だと云ふことは、夢にも知らないでせう。それも其の筈ですわ、私一度もあの方にお目にかゝつたことがなかつたんですもの。だものですから、つひ何の氣もなしに、私の身の上話をしたついでに、秘密を辯づてしまつたんでせう。』
竹村はじつと聽いてゐた。
『まさか私の口から洩れたがために、あの事が警察の耳へ入つた譯でもないだらうと思ひますけれど……』と、お信は心苦しさうに分疎らしく言つて、でも、後で私氣がついて、大變なことをして了つたと思ひましたわ。それで、私も二度も三度も。裁判所へ呼ばれて調べられちやたんです。貴方もその事件は知つていらつしやるわね。』
『知つてゐる。』竹村は暗い目をして言つて。
『何にしても、渡瀬さんに御迷惑のかゝることでせう、だもんですから私氣になつて〳〵爲方

がないんですけれどね。』お信は沈んだ聲で言つて、
『私何といふ馬鹿なんでせうと思つてね、今日お宿へ伺つて、切めて貴方やお坊ちやまにお詫をしやうと思つてゐましたの。』
『だつて爲方がないさ。』竹村は其の無智さ加減がいくらか氣毒にもなつて、責める氣もしなかつた。
『でも私自分の心に濟まないの。』
『と言つたところで、出來たことは爲方がないぢやないか。それにお信さんの口から洩れなくとも、惡事といふものは何時か知れるものだからね。』
『ね、それあ然うかも知れませんけれど……』と、お信はいくらか安心したやうに、
『貴方にさう言つて戴くと、私も大變嬉しいのよ。稚い時分から、私の心を知つてゐて下さるのは、貴方より外には無いんですからね。ほんとに惡く思はないで下さいね。』
『僕は何もかも承知して遣つた田代が惡いと思つてゐる。』

『私あの人にもお氣毒なのよ。ほんとに惡い氣でなすつたことではないんですからね。私ほんとに懲々しましたわ。』

そんな話をしてゐるうちに、ふと氣がついて見ると、正一と辰子とが、徐々此方へやつて來た。

竹村は今更避けることもできなかつたので、爲方なし椅子にかけたまゝ待受けてゐると、嬰て二人は圍ひのなかへ入つて來た。

母と子

辰子は然し有繋に心に咎めて、我知らず顏が紅くなつた。自分が渡瀨の家を出てから、沼田と同棲してゐることは、今では殆んど公然の秘密だから、竹村ももう十分それを知つてゐるであらうし、近頃は又叔父の岩本の意地惡から、裁判事件が起つてもゐるので、竹村からも如何なにか怨まれてゐることだらうと思ふと、かうして顏合された義理ではなかつた。然し彼女にも自分の行爲に對する反省よりも是認する傾向が多分にあつた。で、又、不思議なことには、自分の現在の幸福で自由な境遇を、見せ衒かしたいと云ふ虛榮心も十分あつた。實際また彼女は東京の女らしい虛榮をもつてゐた。

で、彼女は、何も竹村などに然うぴよこ〳〵するに及ばないと云ふ、いくらか高慢な態度で彼に近づいて行つたのであつた。そして自分からお辭儀をするのも業腹だと云ふ風で、ちよつと、紅い顏をして竹村を見ると、そのまゝ横を向いて、正一に何か話しかけた。

『ではちよつと貴方から、お斷りをしておきなさいよ。』彼女は其一言だけは竹村にも聞へるやうに、正一に言つた。

竹村は何事かと思つだが、多分こゝで逢つたをの幸ひ、自分の宿へ正一を連れて行かうとでも言ふのではないかと思つた。

正一はちよつと逡巡してゐたが、爲方なし竹村の傍へ寄つた。

『竹村さん、御母さんがね、僕に遊びにこないかと言ふんですけれど、行つても可いですか。』

正一は微聲で、心苦しげな表情をして竹村に訊いた。

竹村も普通なら、絶對に反對するところであつたらうが、彼も此頃は辰子を憎む心が、いくらか薄らいでゐたし、渡瀬と自分とのなかに聊か隔意もできてゐるので、氣持が變つてゐたが、然し態度を變へることはできなかつた。

『さうね。』彼は正一の顔を凝視めて、

『何か特別のことがあればだけれど、ちよつと困るね。』と拒まない譯に行かなかつた。

『可いでせう。』お…が傍から嘴を容れて、

『ね、お坊ちやま、入らつしやいよ。』

『いや、然し……』と、竹村は困惑の色を浮べて、

『こゝでは正一君は僕が預かつてゐるんですから。』

すると其時、辰子が初めて、こつちを振顧つた。

『御免ださいよ。私御挨拶もしないで……。』と、彼女はやつぱり紅い顔をして、

『今思ひがけなく此子に逢つたものですからね、何なら遊びによこして頂きたいと思つてね。』

『然うですか。』竹村は言つたきり俛いてしまつた。

『それに病後だといふぢやありませんか。道で何だか顔色も惡いし、大變痩せてゐるようですから幸ひ私も來てゐるし、宿も廣くて見晴がいゝのですから、ちよいちよい泊りによこして頂きたいと思ひましてね。その位のことは介意はないだらうと言つたんですけれど、正一が貴方に訊いてからにするといふものですから……。』

暴風雨

一

三人に別れて竹村は宿へ歸つて來たが、何うしたのか何時になない物寂しさを感じた。實はお信の事を忘れやうと思つて氣を紛らせに外へ出たのであつたが、反つてそれを募らせたやうなものであつたそして自分ではそれを打消してゐながら、妙に心を惹き付けられてゐた。

直に日暮方になつた。外は風が出てきた、波の音もたかく聞ゐた竹村は獨り膳に向つて寂しく箸を執つたが、今迄にない物足りなさを感じた。風はだん〳〵吹き募つて、雨さへ添はつてきた、もう正一が歸つて來さうなものだと、心待に待つてゐたが、何うしたものか彼は歸つて來なかつた。旋て九時過ぎになつたので、もう歸らないものと諦めて、臥床に入らうとした。

すると其時、廊下の方に人の足音がして、ふと部屋の障子に女の影が差した、そして其れと同時に、

『いや、それあ然し困りますね。後で先生からお叱言が出ますから。』

『だからそんな事は話さなければ可いぢやありませんか。』

『それあ然うですけれど、僕にも責任がありますから。』

『あなたに御迷惑かけるやうなことはしやしませんから、安心していらつしやいよ。』

『けれど萬一……。』竹村はもぢ〳〵してゐた。

辰子は思つたより竹村の腰が弱いので、次第に調子も和いで、

『貴方も御意屈のをりには、ちよつとお遊びに入つしやいよ。あの時のことはあの時のことしてね。何も私と貴方の間に怨みも憎しみもあつた譯ぢやないんですものね。それにお信は貴方と同村だと云ふぢやありませんか。』

『もうお寢みですか』と云ふ、遠慮がちな聲がした。
それは確かにお信であつた。竹村は何こなし胸が躍つた。そして默つてゐると、お信はまた聲をかけた。
『私ですのよ、入つても可うございますか』
竹村は一寸狼狽へたが、わざと落着いて、
『お入りなさい』
と、信は障子をあけて、
『御免なさい』こ、優やかに郊屋の中に入つて來た。
外は一層暴風雨が募つてゐた。
『先刻程は何うも失禮いたしました。何だか急に天氣が變つて來ましたわ。』お信は然う云つてそこに坐つた。
『正一君は？』と、竹竹は訊いた。

『お坊ちやまは、實は此の暴風雨だものですから、濟みませんが、今夜は御母さまのお傍で二晩お泊りになる筈で、もうお眠みになりましたの。それで其事をちよつこお斷りして來るやうにとのことでございました。』
『さうですか。それぢや止むを得ません。竹村は不興げに言つた。
お信は妙にもぢ〳〵してゐたが竹村もぎこちなく机の前に坐つたまゝ、ぷか〳〵こ莨を吹してゐた。ざあつと云ふ浪の音が絶えず二人の耳を脅かした。荒れ狂ふ風の叫びも物凄く聞えた建物が悪いので、その度に氣味が悪いほど搖すれた。
『おゝ可怕いこと！』お信は悸えたやうに體を悚めながら呟いた。
『何だか急に荒れてきましたね』と、竹村も風の音に耳を引立てながら呟いた。
『私出て來がけには、まだそんなでもなかつたんですが、何うしたんでせうね。これぢや迚も歸れやしませんわ。貴方御迷惑でも暫くおいて下さいな。そのうちには過むでせうから。』
お信は心持顏を紅くしながら言つた。

『さあ、何うですか。此風はとても今夜中には、止みさうもありませんよ。何なら伸でもさう言ひせまうか。宿で待つてゐるこ可けませんから。』社材は言つた。

『さうねゐ……。』お信は困惑の色を浮べて。『其にも及びませんわ。お邪魔なら私お暇します わ。』

『そんな譯ぢやありません。僕も今夜は何だか寂しくて爲方がなかつたので、まだ時間は早いが詰らないから、寢やうと思つてゐた處です。ぢやお茶でも煎れませうか』

『其ぢやちやうご可かつたわ。お茶なら私が煎れてよ。』お信は甘ゐるやうに言つて其處にあつた茶盆を引寄せながら呼鈴を押した。そして女中が來たところで、

『姉さん濟みませんが、これを入替ゐて下さいな』と吩咐けた。

『さう〳〵、私好いものを持つて來てよ。』お信は又急に思ひ出したやうに障子の蔭に置いた包を持込んできた。

二

何を持つて來たのかこ、竹村が見てゐると、お信の釋く縮緬の風呂敷の中からは、葡萄酒が一本に、こきわ亭の製造に係るらしい豚の腸詰が三本ばかり、そして其の側には色々の西洋菓子を空箱につめて一箱入れてあつた、

『大變失禮ですけれご、貴方に召食つて頂くやうにと、お神さんからのお使物ですの。』お信はさう言つて、其等の品をそこにあつた菓子器に移した。

『何です、それは……』こ、竹村は困つたやうな顔をして、

『そんな物を貰ふ理由はありません。僕は困るです。』

『何ですね、折角持つて來たんですから、そんな遠慮などなさらないでも可いんですよ。』

『いや、然し……』こ、竹村はお信の顔を凝視めて、『歸るとき持つて行つて下さい。實際困るんだから。』

『さう。そんなにお氣に障つて？』
『然う云ふ譯ぢやないが、貰ふべき筋がないんだからね。』
『お神さんだつて、別にそんな深い考へてなすつたことぢゃないんですよ。眞の有合せの品で失禮だけれど、上げておくれと言つてね。貴方が厭なら、坊ちやんが歸つて召食るから可いぢやありませんか。』
『それあゝまあ然うだ』と、竹村は漸と莞爾して、『ぢや預がつておかう。』
そこへ女中かお茶盆や菓子や湯を運んで來て、茶を汲んで二人に宥めると、旋て下へおりて行つた。
宿は何の部屋も〳〵、がら空であつた。それに昔風の大樣な建築で、部屋は廣く天井は高く廊下もゆつくり取つてあるので、こんな晩には特に人里離れたお寺にでもゐるやうな氣がした風は段々劇しくなるばかりであつた。雨が可恐しく板戸に吹きつけた。松原をこゑて、浪の音が今にも海嘯が押寄せて來さうな勢ひで、こゝ許に襲つて來た。そしてその度にお信は蒼くな

つて、少しづつ竹村の方へ膝行よつて來るのであつた。
『何だか可怖いやうな晩ね。』お信は襟を搔き合せながら、顫ゐてゐた。
『家が潰れやあしないでせうか。』
『まさか』と、竹村も不安に襲はれながら、寂しげに笑つた。
『寒いから火でも興しませうね。』お信はさう言つて、火鉢に炭を注ぎはじめた。が、その間にも時々暴風雨に脅かされて、氣味惡さうに目を睜り耳を聳てた。
『海もいゝけれど、始終こんなに荒れるんでせうかね。』お信は火を吹いて火照つた顔をあげた。
『始終荒れて堪まるものか』竹村は笑つてゐたが、ふと思ひついて、
『お信さんは、是からあの家で働くつもり？』
『にゝまあ然うなんですけれどもね』と、お信は眸尻へ掛つた素毛を細い指で搔揚げながら含羞んだやうに竹村の顏を眺めて、

『何しろ客商賣ですから、父や兄は不賛成でしたの。だけれど、女工よりお金になるさうだし身綺麗にもしてゐられますから、それだけが取柄だと思つて、來て見ましたの。』

『其は然うだよ。それに下のカフェはあの邊の若い男や、ハイカラな紳士が澤山來るからね。』

『そんな事は何うでも可いけれど當分東京見物のつもりで辛抱しろと言ひますからね。東京へお歸りなすつたら、貴方も時々來て下さいね。私おごりますわ。』

そのうち二人はいつか戀愛談に移つて行つた。そして時の移るのも忘れてゐた。

すると其時年の行かない女中が二人上つて來て、

『お客さまはお泊りになりますか』と訊いたので、二人は些と目を見合つて顔を赧めた

『お泊りになるなら、お床を延べませう。』女中はさう言つて、次の別室に二つの床を並べはじめた。

氣がついてみると暴風雨は前と同じやうな勢ひで荒狂つてゐた。たゞ多少耳に馴れて來たゞ

けであつた。

『こんなぢや迚も眠られやしませんわ。もつと起きてゐませうね。』

と、お信は竹村に私語いて、

『葡萄酒でも抜きませう』、

『さう〳〵』と竹村も氣がついたやうに、壜を取あげてレッテルを眺めてゐた。

『姉さん濟ませんが、後でコロップ抜きと小さいコップかお猪口をね。』お信が吩咐けた。

三

『それで私貴方にお願ひがありますがね、貴方聞いてくれないですか。』お信は更まつた口調にならうとすると、左右田舍訛が出るのであつた。

『僕にお願ひ？』竹村は目を睜つて

『何だか聞いてみなくちや判らないけれど、まあ僕に出來ることだつたら。』

お信は紅い顔をして、悄々してゐたが、
『少し厚ましいお顧だけれど貴方私を妹と思つて下さらない？』
『妹？』竹村は眞執な目色をして、
『それは次第によつては然う思つてもいひけれど、戀愛關係や何かの意味だとちよつと困るんだ』。
『それは私知つてゐますわ。』お信は惱ましげな科で、
『だから私こんなお話をするのは、眞實におはづかしいですけれど、こんな處でお目にかゝるのも何かの因緣だからと云ふ氣がしてならないもんですから……私戀愛關係や何かでなくても可いんですわ。それは諦めてゐますわ。結婚していたゞきたいなんて言つたところで、それは迚も出來ない相談だから、それは諦めますわ。その代り切めて妹と思つて、何彼の力になつて戴ければそれで滿足なの。』
『だゞそれだけのことなら、介意やしないよ。けれどお互ひに若いんだからね、度々逢つてゐるうちに、お互に深入りして、取返しのつかないことにならないとも限らないからね。』竹村は婉曲に言つた。
『それは私も知つてゐますわ。』
『だからね……それを考へると、恁うして打解けて話をしてゐても僕は何だか氣が咎めてならないんだよ。』
『稻子さんに濟まないこお思ひなさるでしやうね。』
『それも有るが……お互に稚い時分からの馴染であるだけに、こんな暴風雨の音を聞きながら、話をしてゐると、妙に昔一緒に惡戯をして遊んでゐた時の氣分に戻つてくるやうで、何となく恁う懷かしいやうな悲しいやうな氣持になるぢやないか』と、竹村はひどく感傷的な調子になりながら、
『それにお信さんは、もう男を知つてゐるんだから尙危險だよ。』
『あら、あんな事を言つて……私と一緒にゐるのが、そんなに可怖いの。』

『僕は自分に不安なんだよ。』
『私歸つた方がいゝの。』
『歸られゝば歸られたで、僕はやつぱり寂しい。其れにこの暴風雨に、獨りこの部屋において行かれちや堪りやしない。』
『ぢや私歸らないわ。そして今言つた私のお願ひも聽いて頂戴ね。』お信は甘ゐるやうに言つた
『まあ、もつと飲まう。』
『だつて、欽二さんはお酒は厭だと言つた癖に……ぢや、私がついで上げてよ。』
ひどい暴風雨が、地上にある有ゆるものを破壞し倒壞しなければ止まないやうな暴力を振ひつゝ荒れ狂つた。二階がぐらぐらつと搖れた。
お信は酒の瓶をもつたまゝ、急に首を悚めて、
『おゝ可怕い！』と、蒼い顏をしながら、我を忘れて、竹村の傍へ寄添ふと同時に、瓶をそこにおいて、いきなり彼の體に縋りついた。

すると其と同時に、今の暴風で斷線でもしたとみゐて、電燈が一しきり赤く輝いて、そのまゝすつと消ゐてしまつた。
『おや……』と思ふ間もなく、部屋は遽に眞暗になつた。火鉢の火が微に赤く見ゐるばかりであつた。
暴風は水のやうに引いて行つて一時世界が寂滅したかのやうに靜かになつた。風の向きで浪の音も遠かつた。

惱

一

翌朝は嘘を吐いたやうに。けろりと暴風雨は風いで、空は遙かに碧く澄みわたり、日は隈なく照渡つてゐた。風の狼籍の跡は、つひ庭先の松の枝の折れたのや、倒れた袖垣や、落ちた樋や瓦などにも明かであつたが、湯殿の煙突も倒れてゐた。

竹村とお信の目をさましたのは、もう八時過ぎであつたが、彼が起きて出た頃には、お信は淨手をつかつて床の間にあつた鏡臺の前に坐つて、髪や顔を直してゐた。彼女は宿の浴衣に單衣羽織を着て、何となくだらんとした風をしてゐたが、竹村と顔を見合ふのを避けるやうに、後向きになつて顔を扮つてゐた。

軈て竹村が階下へおりて、淨手をつかつて來ると、昨日二人飲食ひをした座敷は、女中が綺

麗に取片着けてくれて、餉臺のうへには朝茶の用意がされてあつた。お信は手摺ぎわへ出て、庭を眺めてゐた。

竹村は何と云つて口を利いていゝか解らなかつた。淡い羞恥と悔恨が惱ましく胸に泌出してゐたが、それと同時に今まで知らなかつた、若くは單に漠然と想像してゐたに過ぎなかつた不思議な世界へ、自分もまた足を蹈入れたのだと云ふ慾望の飽滿と歡喜とを感ぜずにはゐられなかつた。彼は明かに稻子の愛を裏切つたのだと云ふ、罪惡感に責められながらも、お信と供に過ごした一夜のことが一生忘れがたいものゝやうに思へてゐた。誘惑的な彼女を憎み呪ふ心と共に、抵抗することのできないやうな愛着が湧いてゐた。それは悲しんでいゝか悅んでいゝか解らないやうな、甘い惱ましい一種の遣瀨ない氣分であつた。今朝見る日光が、淸澄した昨日の其と違ふやうにさへ思はれるのであつた。

『ちよいと御覽なさいよ。池が木の葉で埋つてしまつたわ。』お信は手摺にもたれてゐながら、竹村を振顧つて、莞爾した。

竹村はその聲や目が、昨日自分を誘惑した憎むべきものだとは思ひながらも、今朝はまたまるで異つた意味で、自分を惹着ける力を持つてゐるやうに感じて、知らず識らず彼女の傍へ寄つて行つた。

『今女中さんに聞いたら、濱方で潰れた家もあるんですて。それあ然うでせうね。何しろあの風ですもの。』

『さう』と、竹村は彼女の顏に見惚れながら應へた。

『何こいふ可恐しい風だつたんでせう。私ほんとに可怕かつたわ。』お信は心持顏を紅くして、

『わたしあれから今朝まで一ト寢入に寢入つてしまつたわ。もう一時だつたでせう。』

『さあ』と、竹村もにや〳〵して、

『僕は枕についてからも時々目がさめて爲方がなかつた。』

『惡いことをしたと思つて！』お信は試すやうな氣持で訊いた。

『いゝや』と、竹村も顏を赧らめたが、

『しかしあの暴風雨さへ吹かなかつたら、僕は今でも不斷の氣持でゐられたんだ。』

『欽二さんは後悔してゐるんだわ』

『それあ誰にしたつて、平氣でゐられる筈はないんだからね。』

『私が惡かつたんだわ。』

『惡い好いの問題よりか、是からが何うなるか、それが不安でならない。』

そこへ女中がお膳を運んで來た。

二人は餉臺に向つて、朝飯の箸を執つたが、お信は始終燥いだやうな氣持で、女中に退つてもらつて、自分が給仕をした。竹村もどこか凌られるやうな氣持で、不思議な惑溺の樂しさに引入れられてゐた。

二

お信は朝飲がすんでからも、歸る〳〵こ云ひつゝも容易に歸らなかつた、竹村も早く歸つて呉れゝば可いこ思ひながらも、お信が歸りさうになるこ矢張物足り、かつた。それに昨夕床についたのが遲く、床についてからも風こ波の音に脅かされて、熟睡するこゝができなかつたので十時頃になるこ竹村は話つかれて、其處に横になりながらうと〳〵こ微睡むのであつた。お信は懈い身體を横たへて肱枕でうつ〳〵してゐた。

すると間もなく、竹村はうこうこゝ夢現のやうな自分の耳元へ、誰か入つてくる足音が聞にゐるやうな氣がした。女中が毎朝今時分極つて持つてくる東京新聞を配りに來てくれたのだな、と思ひながらそれを取つて讀む氣もしないで、やつぱり眠つてゐた。

そうかと思ふと、その場の光景が俄に一變して、其がちやうご昨夜お信こ一緒に甘い戀を私語き合つてゐる自分であつた。二人は離れかたはいものゝやうに戀の歡樂に耽つてゐた。す

るとそへ段梯子を上つてくる人の足音がして、ふと目をあげてみると、そこに稲子が蒼い顔をして、怨みがましい目で、二人のみだらな樣子を凝視めながら立つてゐた。

竹村は喫驚した。そして側にゐたお信から離れて、がばと跳おきた。

『その人は誰なの？』稲子が訊いてゐるやうに思つた。

『これ？』と、竹村はぎまぎして、

『これは僕の子供の時分の友達なのだ。僕は事によると此女と結婚しなければならないかも知れない長いあいだ二人は戀しあつたなかなのだ。それは何日かは稲子さんの耳へも入れなければならないことだとは思ひながら、つひ今日まで秘密にしておいたのは、僕が惡い稲子さん。僕は貴女を欺いてゐたのだ。僕はそれを後悔してゐる。自分の惡いことも知つてゐる。しかし二人の秘密を見られた今となつては、正直に自分の罪を告白するより外はない。ごうぞ僕の罪を赦して下さい。』

稲子ははら〳〵と涙を流した。そして默つてゐたが、旋て兩手で顔を蔽ふて聲を立てゝ泣き

竹村は後から抱きすくめるやうにして、其の手を目から離しながら、慰めの辭をかけたが、稻子はすねたやうな風をして、彼の手を拂退けた。

その樣子が竹村にはいぢらしくて爲方がなかつた。そして何うかして彼女の怒りを和めやうと思つて、色々に甘い言葉をかけたり、脇の下へ手をいれて擽つたりしてゐた。稻子はくすくす笑ひ出して、二人はいつか心が打釋けた。そして怨みも羞恥も忘れて割なきものゝやうに睦あつてゐた。

『お手紙でございますよ。』

ふとそんな聲が、微かに耳に入つたと思ふと、竹村は忽ち目がさめた。そして今のうつらうつらと微眠みかけてゐた心に描かれた幻象だと云ふことが解つた。

見ると餉臺のうへに、東京の新聞があり、手紙もあつた。女中が今おいて行つたものであつた。

竹村は急いで手紙を取りあげたが、それは田舍から來た稻子のであつた。と看ると、お信は白い肱で頭を支へて、眠つてゐた。で、彼はそつと手紙の封を切つて、讀下した。

稻子の手紙には、これと云ふ變つたこともなかつたが、父と正一が出て行つたことや、正一のことを宜しく賴むと云ふことなどが書いてあつて、それから不幸續きの此頃の家の樣子や、父の氣むづかしくなつたことなどについて、悲哀に充ちた文句が少しほかり並べてあつた。父が田舍へ歸り次第、自分も出て行くと云ふことも書添へてあつた。

竹村は言ふに言はれない惱みを感じた。

三

直にお信が目をさました。

『御免なさいよ、私到頭眠つてしまつたわ。』

そして竹村が狼狽へた樣子で、手紙を捲きおさめてゐるのを見ると、

『どこから來ましたの』と、訊いた。
竹村は默つて懷ろへねぢ込んだ。
『稻子さんから來たんだわ。屹度さうだわ。』お信は笑ひながらも目の色が曇つて、
『私にちよつと見せて頂戴よ。』お信は甘ねるやうに言つた
『見る必要はないよ。』竹村は惱しげな調子で言つた。
『いゝぢやありませんか。ちよつと見せて下すつたつて。』
『それは介意やしないやうなものだけれど、別に見なくたつて可いぢやないか。』竹村は窘めるやうに言つたが、投出したやうな調子で、
『だが、見たけりあ見たつていゝよ。』と、手紙をそこへ出した。
さうなるとお信も、何だか氣がひけて、手にも觸れなかつた。そして暫くすると、彼女は興ざめのしたやうな顏をして、
『私もうお暇しませう。』

『歸るかね』と、竹村は機嫌を直して、
『ぢや散歩がてら其處まで送らうか。』
『いゝね、私一人で歸ります』と、お信は浮ぬ顏をして、溜息を吐きながら、
『わたしお神さんに極がわるいから何うしませうか知ら。やつぱり貴方に一緒に來ていたゞかうか知ら。』
竹村は默つて彼女の顏を見てゐた。ふと看ると、いつの間にかお信は稻子の手紙を取あけて讀んでゐた。
『稻子さんが入らつしやるんだわね。』
『來るたつて、急のことぢやない。』竹村は寂しく笑つてゐた。
『あなた嬉しいでせう。』
『笑談ぢやない』と、竹村はいらゝしした調子で、
『僕はどこでも平氣で稻子に逢へやしない。』

『澄してゐれば可いぢやありませんか。』
『僕は良心に咎める。』
れでも稲子さんの方が、ごんなに好いか知れやしないわ。私なぞいくら思つたつて、一緒になる氣遣はないんですもの、御結婚なすつてしまへば、貴方は私のことなぞ憶出しても下さらないに決つてゐるわ。』お信は詰らなさうに言つて、溜息をついた。
『稲子が幸福だつて？』と竹村は悲しげな目をして、
『何で稲子が幸福なものか、僕が若し默つて稲子と結婚すれば、稲子は何にも知らずにゐるかも知れないが、お信さんの目から見れば、稲子は馬鹿に見ゐるだらう。』
『あら、私そんな……』と、お信は竹村を打つ眞似をして、
『私稲子さんを可羨しく思ひこそすれ、馬鹿になぞ見ゐやしませんわ。』
『もし又この事を打明ければ、稲子は非常に失望するだらう。欺かれたと思つて口惜しがるだらう。何方にしても幸福ごころの騷ぎぢやありやしないぢやないか。』

『その位のことは爲方がないわ。またそんなことを奥さんに言つて聞かせる人もないぢやありませんか。』
『しかし其のために、僕は一生後暗い思ひをしなければならない。』竹村はお信の顔を凝視めて、
『そして又恁う云ふことは、いつか曝露しないではゐないものだからね。』
『それも然うね。』お信も心配さうに、
『それに恁うしてゐるうちに、段々深入して、お互に別れられないやうになつてしまふわ。私何だか然う云ふ氣がしてならないわ。貴方が稲子さんと一緒になるときのことを考へると、私何だか厭な氣持がするわ。』
『それは爲方がない。』
『私も諦めてゐますけれど。』お信は切なげに又溜息を吐いた。

四

愚圖々々してゐるうちに、もう十二時になつたので、お信は思斷つて別れを告げた。

『午後あちらへもお遊びに入つしやいよ。お待ちしてゐますわ。』お信は言を遺して二階を降りて行つた。

部屋は急に寂しくなつて來た。彼はお信がゐればゐたで氣が咎たが、居ないとなると、日が落ちたやうに其處等が詫びしく思へた。その寂しさも、昨日までの其とは違つて、心の底に喰ひ入るやうな寂しさであつた、そして其にはお信に對する強い愛着の附絡つてゐることも、明かに感ぜられた。一度足を踏入れた不思議な享樂の世界から、舊の平凡な寂しい世界へ投出されたやうな感じであつた。

竹村は、異性と云ふものゝ、可恐しい力を、今初めて知つた樣な、奇異な感じがしたと同時に、目に見ゆるものゝ總てが、別な意味を以て、微妙な音樂を奏してゐるやうに感じた。

惱ましいその一日も暮れかゝつて來た。低い寂しい波の音を聞き、松原のあへにかゝつた蒼い夕濛靄などを見るにつけても、お信の聲が目が懷かしく目さきにちらついて、じつとしてゐられないやうな氣がした。

で、夕飯をそこ〳〵に濟ますと、ステッキを提げて、氣を紛らせに海岸の方へ出て行つたが、つい此頃まで親しんでゐる大自然の色も、今は彼に取つては、何の興味もなかつた。波の音も物憂い單調なものにしか聞かれなかつた。漂渺たる水煙に濡された遠い島山の影も、彼の目には遣る瀨なく寂しかつた。

彼の足はいつか又町の方へ向いて行つた。お信が辰子と一緒にゐる宿の方へ……。

町にはちら〳〵灯がついてゐた。暴風雨の後の秋らしい冷々した風が、薄寒く肌を舐めるにつけても、彼は何となし感傷的な氣分を唆られて、お信に逢はずにはゐられないやうな氣がした。

旅館の前まで來たとき、さすがに竹村は氣が臆して來て、ちよつと躊躇したが、正一も來て

ゐるので、訪問の口實には事かゞなかつた。
番頭に取次を頼むと、彼はやがて二階の見晴の好い廣々した部屋へ案内された。ちや時分で、正一と辰子とは一つ餉臺に向つて、親しげに箸を執つてゐたが、お信もその端の食事をしてゐたらしかつた。
『まあ、よく入して下さいましたね。』辰子はさう云つて、愛相よく彼を迎へた。そして餉臺の傍を離れて來て、
『さあ何うぞ……貴方はお夕飯は？』
『濟みました。』竹村は辰子に對する敵意も輕蔑も、お信の愛の前には、氷のやうに解けてしまつて、
『實は正一君が何うかと思つて、樣子を見に來たのです。』
『あゝ、然うでしたか。』辰子は揉手をしながら、
『いゝわね、今日はお返しゝやうと思つて、私がつれて行くつもりだつたんですが、この人が

ね、二三日は可いだらう、竹村さんも承知だといふものですからね』と、口上手に言繕つた。
『それあ介意ひません。ごうせ五十歩百歩ですから。』
辰子はお信に、
『あの、何か竹村さんに…何がいゝでせうね。洋食はまづくて迚も食べられないし。』
『いや僕ならごうぞ……。』
『でも折角入して下すつたのに』と、更にお信の方へ、
『まあ仕方がない。何かおいしいものを見繕つて二三品ね。』
『よございます。』お信はさう言つて、下へおりて行つた。

五

竹村は腹が飽いので、御馳走を食べることは出來なかつたが、浮々した辰子とお信との話が陽氣なので、つい釣込まれて、偶に肉叉を動かしてゐた。それに此處には稲田の飲料や、辰子

のものらしいウキスキーやキラソオのやうな飲料などがあつて、それをも侑められた。
『昨晩はまたお信が御厄介になりまして、貴方もさぞ御迷惑でしたらうね。』と、辰子は二人の顔を見比べた。
竹村は冷りとして、自然に頭が下つた。
『お信も欽二さんと同じ村なんですね。不思議な縁ぢやありませんかね。この娘も田舎にしては一寸澁皮が剝けてゐますからね、あんな山のなかに置くのは惜いと思つて、私がつれて來たんですけれど……。何うですねちつとは女振が上りましたか。』
『さあ。何うですか。』竹村は苦笑した。
『お神さん、そんなことを仰つちゃ不可ませんよ。』お信は紅い顔をして言つた。
『さあ欽二さん、少しお飲みなさいよ。』辰子はウキスキーの瓶を取上げて、
『先刻から隨分中てられましたよ。何しろこの人は欽二さんのお惚氣で持切りなんですからね。』

『嘘ですよ。お神さん素破ぬいちや厭ですよ。』お信は紅くなつた。
竹村も顔が火のやうになつたで、爲方なく酒で紛らさうと思つてぐつとウキスキーを半分ばかり飲干して吻と息をふいた。
『だつて可いぢやありませんかね。別に悪いことをした譯ぢやなし、若いうちには有がちのことだもの。』辰子は戯悪ふやうな、煽るやうな調子で言つた。
『お神さん、そんな事はないんですよ。さう思はれては欽二さんが御迷惑ですわ。稲子さんこいふ未來の奥さまがあるんですもの。』
『稲子は稲子さね』と、辰子は鼻で笑つて、
『奥さんが決つてゐるから、色が出來ないと云ふこともないぢやないか。さあ、お信さんお前さんもこゝへ來てお酌をなさい。』
『厭ですよ、お神さん。』お信は居堪まらなくなつて、席をはづして廊下へ出た。
『それから欽二さん』と、辰子は萎れきつてゐる竹村に向つて、

『私折入つて貴方にお願があるんですがね。』
『は』と、竹村は漸と顔をあげた。
『正一も大病をして、まだ體が眞實でないやうですから、丈夫になるまで私少し看てやりたいと思ふんですがね。』
『然うですね』と、竹村は困惑の色を浮べて、首を傾げた。
『それには海岸も可いですけれど、其よりも何處ぞお湯へ行つた方が、早く體に利くだらうと思ひますの。』
『さあ。』
『でね、暫くのあひだ、私が熱海か函嶺へでも、あの子を連れて行つてやりたいと思ひますの。』
『しかし其は迚も先生がお許しにならんでせうから。』
『ね、だから貴方に折入つてお願ひしたいと思ふんですがね、不可ませんか。』

『僕としては、何うもお返辭は爲かねるですが……』と、彼はいら〳〵しばに、又ウキスキーのコップを口へ持つて行つて、
『それに我々の方では、溫泉の効力と云ふものについて、さほど重きをおいてゐないのです。一つは體質にもありますからな。』
『熱海なら好いでせう。』
『あれは格別利がないといふぢやありませんか。』
『でも、こんな寂しい海岸にゐるよりは可いでせう。土地も開けてゐますし、食物も好いんですからね。』
『先生に伺つておきませう。』
『それぢや矢張駄目でせう。』辰子は厭な顔をした。

六

竹村は照かくしに飲んだウヰスキーの醉が、極の悪い程甚く顔に出て來た。で、そこ〳〵に其處を切揚げ樣と思つたが、あの寂しい宿の部屋へ歸つて行く時のことを思ふと、お信でも誘ひ出さなければ、迚も遣切れないと思つた。

『正一君、今夜は僕と一緒に歸らうぢやないか。』

竹村は直接お信に來いとも言出しかねて、わざと正一に勸めた。

『正ちやんですか』と、辰子は厭な顏をして、

『正ちやんは何處にゐるも同じですから、今暫くこゝに置いて行つて頂きたいんですよ。それから今お願した温泉行のことも、是非欽二さんに承諾して頂かなくちやあ。』

『それは何うも……』と、竹村は苦笑した、

『いゝぢやありませんか。何なら欽二さんも一緒にいらつしやいよ。こんな寂しい海邊にゐるよりか、何のくらゐ好いか知れやしませんよ。』

『然うも行きませんよ。』竹村は機械的に答へて、

『では僕はお暇します。』

『まあ、もつとお話しなさいな。何なら此方に泊つていらつしやいよ。何うせ恁うなれば内輪同士ですから。』

『先生に叱られます。』

『先生々々つて、あんな先生がそんなに可怕くて何うするんですか。』

『可怕い譯ぢやありませんが、此頃の先生もお氣の毒のやうです。この上正一君にまで別れては遣切れないと思ふんです。』

『でも先生には稻子と云ふ者もあれば、貴方もあるんですもの。詰らないものは私ですよ。』

『何故ですか。』竹村は少し强い語調で反問した。

『だつて然うぢやありませんか。十年も十五年もあの山の中にゐて、女の一番面白い盛りを溫端で燻つてゐたんですもの。そして其の揚句に子供までとられて……。』

『そんなに田舍の生活が、厭だつたんですか。』竹村は反問したが、自分にも同じ氣持がないこ

とはなかつた。殊にこの一兩日は、お信によつて何かしら未知の世界へ出て來たやうな氣がすると同時に、窮屈な許嫁なごの束縛から脫れて、放縱な戀に醉ひたいやうな慾望が、連に湧いてゐた。稻子の愛を裏切るには忍びなかつたが、去てお信ごこのまゝ切れて了ふのも苦痛であつた。

『それあ然うですごも』と、辰子もほんのり醉の出た目を美しく輝かして、

『欽二さんなんか、平氣であの山の中で一生暮せると思ひますか。』

『さあ。其も何うなるか判らないんです、この頃は僕も先生に信用がありませんから。貴女の事件があつてから、僕はひごく先生の機嫌を損じてしまつたんです。僕が貴女を出しでもしたやうに先生は思つてゐられるやうです。』

『さう!』ご、辰子は驚いたやうに言つたが、その話は避けたいご云ふ風で、その儘口を噤んだ。

間もなく竹村はそこを出たが、辰子の計らひでお信もそこ迄送るご言つて、一緒について出た。

七

送つて來たお信と一緒に、途々話ししながら宿へ歸つてみるご、裏梯子から二階へ上つた處で、ふと行逢つた女中が彼の顏を見て聲をかけた。

『お客さまが待つておいでになります。』

『お客だつて？へゝ!』と、竹村は空虛な聲を出して、驚いて立止つたが、それと同時に其時段梯子を中程まで上つて來たお信を振顧つて、ちよつご目配をした。

實は竹村は、來る途中でもちよつご氣のついたことではあつたが、何時渡瀨が東京から遣つてこないとも限らないと思つた。で、お信を自分の宿へ連れて歸ることの危險であるのは勿論だが、正一をあのまゝにしておいては大變だご云ふ氣がしてゐたのだが、お信のことで頭腦も紊れてゐたし、今となつては舊の他人となることもできないやうな破滅になつてゐた。お信も

同じやうな氣持で、この一夜を彼と別れて過せやうとは思へなかつた。逢はぬ前なら左に右、一度でも甘い戀を私語き合つたとなると、そのまゝ別れるのは辛かつた。不思議な執着が二人の心を捉へてゐた。

で、到頭二人は一緒に竹村の宿まで來てしまつたのであつた。

客が誰であるかは、竹村には直ぐ感づけた。で、お茶を返すと同時に、急いで正一を寄越すやうにと取計ふより外になかつた。そして手際よく此場を胡魔化すより外に道はなかつた。

『僕の友人が一人此處へ來てゐるので、正一君は今その男と一緒に散歩してゐるとでも言つておくから、左に右お信さんが歸つて、大急ぎで正一君を歸らしてもらはう。ねゑ、さうしないと僕が困る。お神さんやお信さんは介意はないだらうが、正一君と僕が困る。實際僕は先生に信用がなくなりかけてゐる處だから、お信さんとの關係が、少しでも耳に入るか目に入るかした日には、それこそ大變なんだ。恁うなれば、僕も怕れはしない。知れた時は知れた時だと云ふ氣もしてゐる。その場合には、僕も潔く覺悟をする積だ。然し今はまだ早い。僕も自分から事を破るやうな、愚かな眞似はしたくないからね。それに正一君は何うしても直ぐ歸ることにしてもらはなければならん。お願だから、大急ぎで歸つてくれたまへ。』竹村は急込んだ調子でお信に言つた。

『ゑ、可いわ。解つてゐますわ。』と、お信は應へたが、竹村の狼狽へ方が少し甚いので、彼女はしげ〳〵と呆れたやうに彼の顏を見てゐた。

すると其時、生憎なことには、下の座へでも行つたものとみゐて、渡瀨が浴衣のうへに溫袍を引かけて、のそ〳〵と段梯子を上つて來た。それが上に立話をしてゐる竹村の目に映つた。竹村はこれは可けないと思つた、そして氣もつかずにゐるお信を隱さうと思つて、彼女の手を引張つて廊下の曲り角へ行かうとするとき、渡瀨の上を見上げる目が、眼鏡越しにちらりと彼の視線に出逢つた。

竹村は爲方がないと思つて、度胸を決めた。そして其まゝ二三歩引返した。

『や、先生でしたか。』

渡瀬は梯子を登り切つた處で、にやりと笑つて、ちよつと眼鏡を直した。

『や、今歸つたのか。先刻から待つてゐたよ。』

『失禮しました。』竹村はさう言つて、渡瀬と一緒に部屋へ入つた。

『やれ〳〵、酷い荒れだつたぢやないか。此方は大した災害もなかつたのかい。』渡瀬はさう言つて、彼の顏を眺めた。

竹村はそれには答へないで、何かお信この密會の形迹でも家内に見つかりはしないかと、そわ〳〵四方を見廻してゐた。

破滅

一

處で渡瀬は、第二回公判の辯論を引受けてくれる辯護士も略決つたので、ちよつと正一の樣子を見に來たのであつたが、別に心配がないやうなら、直ぐ田舍へ歸らうと云ふ考へであつた。

『正一は何うしたのかい。』渡瀬は聞いた。

竹村はわざと落着いた態度で、渡瀬を心安させるやうに、

『正一君は大變氣分がいゝので、今日も半日僕の友人のところで遊んでゐました。其の友人と云ふのは、實は此の北條病院にゐる、僕より二年ほど前に學校を出た男なんですが……。左に右空氣ぱ好いし、懇意な醫者も病院にゐてくれますから、安心なものですよ。』

『さうかい。それなら可いが……然し夜分は餘り外出しない方がいゝね。』

『勿論です。滅多に出ないのですが、其の男がひどく正一君を可愛がつてくれるものですから……。』

『今の婦人は、あれは何かい。』

『婦人ですて？』

『今、』君が廊下で立話をしてゐる女よ。』

『あゝ、あれですか』と、竹村は白々しい表情をして、言つたが、我知らず顔が紅くなつて。

『あれは其の友人の細君なんですが、正一君を今夜是非泊らせたいと言ふので、寢衣を取りに來てくれたんです。しかし先生がお見ゐになつたから、泊るのは止めて、返してもらふことにしましたから。』

それきり渡瀬も其事については、何の話もしなかつた。そして辯護士の噂や、其の辯護士の此事件に對する見解などについて、熱心に話をしてゐるうちに時間がたつて、餉臺のうへにおいた彼の時計を見ると、もう十時を少し過ぎてゐた。

『正一は歸らんつもりだらうかな。』渡瀬は思出したやうに言つた。

『大丈夫です。あの家のことだから間違ひはありません。』

『それは然うだらうが、然し餘り遲くならんうちに歸してくれないとな。それに私は翌朝は此處を一番で立たうと思ふ。』

『然うですか』と、竹村は胡散な目遣ひをしたが、自分でも氣が氣なかつたので、

『では、僕がちよつと迎ひに行つて來ませう。』

『さうだな、然うしてもらうと大變都合がいゝ。』

竹村は渡瀬の傍にゐて氣を揉んでゐるよりはと思つて、そのまゝ外へ出た。そして左に右辰子の旅館の方へ出向いて行つた。

處で辰子の方では、正一はもう寢かしてしまつて、辰子も今床に就かうとして、寢衣のまゝで散らかつた手廻りの品を片着けてゐる處であつた。お信も傍にゐた。そして竹村が入つて行つて其事を話すと、辰子は平氣な顏で、

『先生が來たんですつてね。今お信から聞いたんですがね、正一はもう眠てしまつたから、明朝でも可いだらうと思つて……それで可いぢやありませんか。折角眠たものを起しちや可哀さうですから。』

『いや、然うは行かないんです。先生は翌朝立つんださうです。それに僕は嘘をついて一時胡麻化しておいたんですから。』竹村は先刻から酒の醉も醒めて、蒼い顔をしてゐた。

『翌朝先生が歸つてしまへば、正一君は直にこちらへ寄越します。今夜一晩のところです。』

『でもあゝやつて、折角氣持よささうに眠つてゐるんですからね。』辰子はまだ醉がさめないらしく、しどけない風をして笑つてゐながら、

『先生の方は何うでも可いぢやないの。貴方の智慧で何とか胡魔化しておきなさいよ。眠込んでしまつて、何うしても目がさめないから、無理に連出して、夜風にあてゝも惡いと思つて、其儘にしておいたとか何とか言つて……。』

『それでは僕が困るんです。』と、竹村は困惑の色を浮べたが、お信も傍から辰子に加擔したので、强ひて爭ふ氣にもなれなかつた。

二

渡瀨の方では、竹村の歸りが遲いので。漸く睡氣がさして來た。で、女中を呼んで蒲團を延べさせることにしたが、女中が二組の蒲團の中の一組を棚から卸さうとすると、束髮の櫛が一つ闘のうへにガラリと音を立てゝ落ちた。小夜着の袖にでも入つてゐた物らしく思へたが、

『おや！』と言つて、女中が拾ひあげる處を、最初渡瀨は何心なく見てゐたものゝ二組の夜具が竹村と正一との分だとすると、櫛など出るのは少し變だと云ふ氣がした。それに女中が其櫛を、何處におかうかとまごついた果に、何か獨語を言つて帶の間へ挿込んだのも可怪いと思つた。女中は十七八の土地のものらしい女であつた。

『姐さん、その櫛は誰のかい。』渡瀨は眠さうな目をしながら訊いた。

『これですか』と、女中は冷やかに

『さあ誰方のでせうか』と言つたきり、さつさと床を延べた。
『ちよつとお見せ』渡瀬は笑談のやうに、輕い調子で言つた。女中は、
『はい』と言つたまゝ躊躇してゐたが、爲方なし櫛を餉臺のうへに置いた。渡瀬はそれを手に取上げて見ると同時に、先刻廊下で竹村にひそ〳〵話をしてゐた女を思出さずにはゐられなかつた。で、女中の顔をじろ〳〵凝視めて、
『男の寢所から、櫛が出ることは些と變のやうだが誰かこゝへ來て泊りやしないかな。』
『いゝね』と、女中は答へたが樂つたいやうな表情をして、汚れた茶盆などを持つて、急いで部屋を出て行つた。
すると處へひよつこり竹村が歸つて來て、不安な顔色で入つて來た。
『正一君は御心配ありません。』彼はいきなり然う言つて坐つた
『ほう、何うしたのかい。』
『もうお眠みです。いくら起しても目がさめないので……尤も今日は運動で疲れてもゐるんで

す。それで、別に今夜でなければならんといふこともないと思ひましたから、其儘にして歸つて來ました。』
『しかし私は明朝一番で立つのだからな。』渡瀬は本意なげに竹村の顔を見てゐたが、
『處で其はそれとして、此處にこんな物がある。是は一體何かい。』
そして渡瀬は櫛を其處へ出した。竹村はぎよつとした。失敗つたと思つた。
『へゝ、櫛ですな。』
『束髪の櫛だよ。』
『何處にそんな物があつたんです。』
『今女中が床を延べやうとすると、小夜着の中から落ちたよ。』
『何うしたんでせう。』
『何うしたのか、君がまさか知らんことはあるまい。』渡瀬は痩せた口元に苦笑した。
『いや然し……』と、竹村はへどもどして、

『女中にでもお訊きになつたら判るでせうが……。』
『女中は感心に何にも言やせんがね、しかし樣子は知つてゐるものゝ、私は感じた。だがまあ可いよ。君が知らんなら知らんでも可いよ。私は君を信用しておかう。たゞこんな物が出たゝなると、正一のこゝが氣がりゝだ。正一の行つてゐるゝ云ふのは、確に先刻の婦人の家に違ひないのかい。して其は何處なのかい。』
『友人の家ですが。』
竹村は半氣らしく言つたが、心は穩かでなかつた。何故卑怯に人を欺くのかゝ、彼の心が彼を責めた。
『さうよ。』
竹村は顔が蒼くなつたが、同時に緊張して來た。
『先生赦して下さい。僕は何もかも言つてしまひます。僕は先生にお詫をしなければならんことがあるのです。』

『ほう!』と、渡瀬は目をぱちくしさせて、不安さうに彼の顔を眺めた。

三

渡瀬は例の靜なねちくした調子で、連に竹村を詰つたり、厭味を言つたりした。で、竹村も若いので、色々踏み込んで詰られると、全く自分の立場を失つたやうな苦しみを感ぜずにはゐられなかつた。渡瀬こしては、それも當然のことだとは思つたが、餘りに苛酷に失つしてをりはせぬかと云ふ淡い憤懣は、竹村の心にもあつた。罪に苦しんでゐる者に鞭を加へるやうなものだと云ふ氣がした。
竹村は行窮つた果に、やゝ自棄な氣分になつて來た。
『ぢや、先生は僕に何うしろこ仰るんです。』竹村は目に涙を浮べながら言つた。
『何うしろの恁うしろのこいふことは、私にも言へないよ。だが、少しは我々のことも考へてみてくれんければ困るよ。』

渡瀬も情ないやうな調子になつて、
『辰子の事件に引續いて、家の田代の裁判事件……今又君に然ういうことを爲出來されたので
は私は全く遣切れんではないか。』
竹村は我知らず頭が下つた。
『大體辰子の離縁問題にしてからが、今になつて考へてみることもつと研究する餘地があつたや
うに思ふ。私は今更愚痴は言はんつもりだが、實際困つたことになつたと思つてをる。』
『それも僕に幾分の責任があると思ひます。』竹村はわざと自分の感情を誇張して言つた。
『僕はその責も負はうと思つてゐます。』
『それならば尚更のことぢやないか。その辰子の使つてゐる女がたとひ昔馴染であるとしたと
ころで、田代の事件の本人である點から言つても、そんな女と關係する氣になつたと云ふ君の
心理が、私には不思議でならんのだよ。私は社會の道德觀念の稀薄なのに驚くより外はないの
だよ裏切れた私はとにかく、稻子に對して、君は何と云ふ無思慮なことをしてくれたのか、私

には幾んど了解が出來んのだよ。』
竹村はじり〳〵責められてほろ〳〵と熱い涙が頰に傳つた。
『少しは私の身にもなつて見てくれんければ、困るではないか私は恁ういふ惡いことをして濟
まないから、今迄の關係を絶つて自由の身になりたいと言ふのでは、何處に君の責任感がある
のか、それを疑はん譯には行かんぢやないか。』
『しかし先生、僕は責任を脱れやうと思つて、先生から離れやうと云ふんではありません。
そんな卑劣な考へで、此事を先生にお願ひしてゐる積りぢやない積りです。』竹村は涙をふるひ
ながら言つた。
『だが結果は同じぢやないか。』
『では何うぞ、僕の取るべき道を敎へ下さい。それが責任を果せることであつたら、何によら
服從します。』
『けれども、外のことゝは違つて、是は取返しのつかんことだと云ふことは君も知つてゐるだ

らう』

『それを知つてゐるから、こんなお願もしますのです。』

『實は、私も今は途方に暮れてゐる。情ないことになつたと歎くより外、何の考へも浮ばんのだ。君を解放していゝか悪いか判斷もつきかねる程、私は狼狽してをるのだ。で、まあ其事はゆつくり考へることにしやうよ。』

『は。』竹村は惱ましげに俛いた。

『それには又稲子の考へも除外することは出來ん。いつそ田舍へ歸つたうへで、あれの心持も十分聽いてみなければならん。』

『は』竹村は微に答へた。

『で、まあ今夜は寢やうよ。私も何だか頭腦がひどく重苦しくなつて來たよ。』

『は。うぞ……。』

二人は何とも名狀しがたい厭な氣分であつた。殊に竹村は渡瀬が床に就いてからも、いつまでも物思ひに沈みながら獨り起きてゐた。

四

渡瀬が別室で寢床へ入つてからも、竹村は獨り此方の部屋で自分だけの物思ひに耽つてゐたが、別にこれと云ふ好い考への浮びやうもなかつた。

渡瀬の口吻によると、彼はどこまでも竹村に離れて行かれるのを好まないやうにも思へるがしかし竹村の過誤に對しては何處までも追窮しやうとしてゐる彼も恐らく解決の道を見出し得ないで、今はたゞ失望と恨みに悶ゑてゐるに過ぎないのだと思はれた。それに從つて、こんな問題を突つつき出さうとは渡瀬にしても思ひもよらなかつたことに違ひないと云ふ氣もしたしかし竹村としては、渡瀬との間に、恁うも色々の氣拙いことが重なつて來たのでは、この先迚も圓滿に治まつては行かないだらうと云ふ氣がした。一旦妥協が成立つて稲子と結婚したとしても、豫期どほりの幸福は、迚も三人の家庭生活に惠まれさうに思へなかつた。

竹村はひどく疲勞を感じて來たが、臥床へ入る氣もしなかつたので、毛布を被つて餉臺にもたれたまゝ、しばらくうと〳〵と眠つてゐた。すると其中に鷄の聲が聞ゐて、時計は早や二時を打つた。と、暴風雨の吹連つてゐた昨夜の今頃のことが、憶出されて來た。お信の其時の媚めかしい表情や猥らな仕草が目について來た。わづか一夜のうちに恁うも自分の心を蠱惑した異性の魅力の强さを思はずにはをれかつた。無垢な稻子に對して曾て思つてみたこともない誘惑感をお信に見出したのであつた。そして荒んだ彼女の氣持や體に嫌悪の情を抱きながらも、それから脱れることのできないやうな焦燥を感じずにはゐられなかつた。

惱ましい一夜が明けかゝつて來た、板戸の隙間をもれて、黎明の白々した光が、微に障子に這寄つて來た。竹村は鬱陶しい部屋を脱れて、私と下へおりると、早や爺やが明けた湯殿口から外へ出て見た。爺やは裏の畑へ出て、しゝこ朝露に濡れた茄子の木を弄つてゐた。

『お早やうございます。』彼は竹村にお辭儀をした。

そこらの藪や、藪蔭の蜜柑などには、濃い朝濛靄がかゝつてゐた。竹村は烟の間の砂地を踏

んで、廣い田圃なかの畔道へと出て行つたが、旋て踏切を渡つて海岸へ出やうとすると、遙か松原の蔭に一人の女の姿が見ゐた。

絞の浴衣に羽織を着てゐるすらりとした姿や、頭髪の形などが、何うもお信らしいので、少し歩を早やめて、その方へ近づいてみると、彼女は亦急ぎ足に此方へ歩いて來た、そしてちよろ〳〵と流れてゐる小川に架かつた小橋のこころで、二人はちかうど顏を合すことになつた。

『まあお早いわね。』お信は睡眠不足らしい、厚ぼつたい顏に、につこり笑を湛へながら言つた

そして、

『昨夜あれから何うなすつたの。』と、氣遣はしげに訊いた。

『僕は昨夜一晩まんぢりともしなかつた。大變なことになつてしまつた。』竹村も胸を跳らせながら。わざと彼女を驚かせるやうに言つた。

『まあ、何うしたといふの。』

『何うも恁うもない、櫛が祟つた！。』

『櫛ですつて？』お信は目を丸くして、
『櫛がおちてゐたことでも言ふの。』
『しかも夜具の袖から……。』
『まあ！』こ、お信は急に顔が引締つて、
『私　何だか然う云ふ氣がしてゐたの。それで昨夜貴方のところへ行つたとき捜すつもりだつたんですけれど、あの騒ぎで泡をくつてお別れしたでせう。だつて其が何うして……。』
『僕は面倒だから、何もかも言つてしまつたんだ。總てを破壊するするつもりで。』
『そんな事をしないだつて、胡魔化す法はいくらもあつたでせうに』と、お信は惘れたやうに彼を凝視めてゐたが、それが却て自分に取つては好いことになつたこ云ふ氣がした。

稲子

一

渡瀬は家へ歸つてから。もう一月になつた。
彼は歸つてからも、絶にて竹村のことを口へ出さなかつた。
彼はあの時海岸の宿で正一にも辰子にも、一寸逢つたのであつたが、竹村の件については、何等解決の道をも見出しかねて、その儘別れたのであつた。そして稲子に其を明かすまいかこ云ふことについて、可也頭腦を痛めたのであつた。
稲子は父が正一をつれて上京した當時は勿論、それから二月もたつた今日になるまで、自分からは時々手紙を出してゐるに拘らず、竹村からに正一と二人合作の簡短な文句を書込んだ景色の繪葉書を二度ほご送つてよこしたきりで、今迄のやうな親しみが失せたやうな氣がしないのでもなかつたので、時々それを不安に思つてゐた。父が歸つて來てからも、竹村の噂を餘

り口にしないのが不思議であつた。或時などは、自分は少し竹村を見損つてゐたやうだなぞゝ失望の口吻をさへ洩らすことがあつた。

稲子は父と彼との間に、何か感情の行違ひがあるのではないかと想像しながらも、それを訊糺すのも不安なやうで、氣にしつゝも惱しい日を送つてゐた。

すると或時父は晩酌のとき、稲子にちよつと話があると云つて、ふと妙な話を切出した。それは思ひもかけない新しい縁談のことで、しかも其も可也差迫つた問題であつた。

『こんな事を言出すと、お前も變に思ふか知らんが、私はこの間からお前に話さう〳〵と思つてゐながら、その折がなかつたが、私はこの頃少し考へることがあつて、醫若の方は私一代で罷めることにしやうと思ふ。それで然うなると、お前の結婚問題についても、自然私の方針が變つて來るわけで、つまり醫者以外の職業をもつた男を、婿養子に迎へやうかと思ふが、お前は何う思ふかの。』渡瀬はそんな風に切出したのであつた。

稲子には全く寝耳に水であつた。何を感じて父がそんな事を言出すのか、たとひ竹村と多少

感情の行違ひがあるにしても、其爲に自分の結婚問題、渡瀬家の相續問題にまで、變動を來すほどのことゝは思へなかつた。

稲子はその説明を求めるやるな表情で、じつと父の顔を見入りながら默つてゐたが、怯々訊いてみた。

『それは何う云ふ譯でございませうか。』

『いや、何う云ふ譯といふこともないがな』と、父は持つてゐた猪口を下において、

『つまり私はこのごろになつて、醫者といふ職業について急に嫌氣がさして來たので、殊にこんな邊鄙に醫者で一生を畢ると云ふのは、考へものだ、私はいゝとしても相續者を必ず醫者に求めなければならぬとなると、渡瀬家代々の職業を繼承すると云ふことは一寸世間體は好いかも知れないがそれでは迚も好い人物を求めることは出來ないと思ふよ。それよりも職業は何でも可いから、人物本位で渡瀬家の相續者として又お前の婿として、恥かしからぬ男を求めるのが、眞實ではあるまいかと思ふが何うかの。』

『ぢや、何でございますか、欽二さんの人物がよくないとでも仰しやるんですか。』稲子は反問した。

渡瀬はきらりと目を光らせて娘の顔を見返した。そして少し狼狽へたやうな表情で、

『いや、格別然う云ふ譯でもないのだがお前も知つてゐるとほり欽二も學校を出たさに、私の家の相續者になつたものゝ、學校を出てしまへば何う氣が變るか解らんので……無論そんな輕薄な男でもなささうだが、田舍へ引込むのが厭になりはせんかといふ心配もあるのだよ。』

二

渡瀬はさすがに正面から切出し兼ねて、遠廻しに婉曲に說諭さうとしたのであつたが、而も竹村この結婚を思切らせやうとするには、それ相當に用意もあつたのであつた。と言ふのは、自分の病家になつてゐる同じ村の人から一寸内意を傳へられたに過ぎなかつたが、その病家の緣家にあたる他の村の或金滿家から稲子を其の二番目の子息の嫁に貴受けたいと云ふ話があつたのであつた。

北方と云ふ金滿家のことは、渡瀬も昔しから知つてゐたが、然しその家が今のやうな富を作つたに就いて、親類や村の人達に對して、人の忍びないことを遣て來た結果だと云ふ噂もあつて、評判ば餘り好い方ではなかつた。その上家庭の風儀も餘り感心した方ではなくて、稲子をほしいと云ふ子息も、長いあひだ東京へ出て、是といふ學歷もなくてぶらぶらしてゐた。不斷ならば渡瀬はその緣談は、一も二もなく斷つてしまふ處であつた。設んば竹村といふ許嫁がないにしても、蟲が好かない北方なぞの子息に、最愛の娘をくれる氣になる筈もなければ、その緣談に耳を傾ける必要もないのであつた。しかし竹村が駄目だとなゝと、早速にも第二の婚を捜さなければ、村へ對しても顏向がならないやうな感じがしてゐた。そして其には然う十分なことは望れないと云ふ氣がしてゐた。多少家柄や人物に非難のあるのは爲方がないと諦めるより外あるまいと思つた。左に右金のある北方との結婚によつて、差當り盛大な式を擧げて自分や稲子の目面を保ち、將來財攻の上で寂れかゝつた玄關を潤ほさうと云ふ希望もあつた。

稲子はそんな事とも知らないので、父が何故に竹村との約束を破棄する氣になつたのかと、それが不思議でならなかつた。果して父の言ふとほりに、醫者がそれほど詰らないものこして も、其は職業上の問題で、箇人こしての竹村の缺點こは言へないと思つた。

『何うだな、それでもお前はやつぱり竹村が好いと思ふのかい。』渡瀬は何とも言はない娘の悒悒した樣子に飽足りぬいやうな表情で、返辭を促すやうに言つた。

稲子の目は深い疑惑の色に曇つてゐた。

『では御父さんは、御自分でお取決めになつたこを、お取消しになるんでございませうか。そして、其事は欽二さんも御承知なんでせうか。』

『欽二が承知か何うかこ云ふこかい。』渡瀬は憐れむやうな目をして、

『それは言出して見ないこだから、私にも判らんが、多分承知するだらうこ思ふよ。私の言ふこは、何によらず不承知を唱へるこのできない義理になつてゐるからな。

『でも御父さん、この事は他のこに遠ひますわ。單だ御父さんが醫者が厭にお成りになつたこ云ふ、其れだけの理由で、是迄のお約束を反故にして了ふ譯にもゐられないかと思ひます。』

『けれども欽二の近頃の樣子を見ると、此方が思ふほどでもないやうだよ、既に轉地先では酒も歡んでゐるし、辰子とも往來をして、現に正一を辰子の手元へやつておくといふ始末だから私の見ないところでは何をしてゐるか知れたものではないか。』

『では、欽二さん何かに不行品なこでもあるんでございますの。』

『まあ、さう言つた形跡が全然ないこも言へんのだ。』渡瀬は訶を濁した。

稱子は思ひもかけないけとが、竹村の身の上に起つてゐるやうな氣がした。正可！と思つて何心なく訊いたことが、案外手應のあるのに、輕い失望を感じたが父こ子との差向ひで、それ以上深入をして訊ねる勇氣もなかつた。

三

『それは左に右こして』と、渡瀬は疑惑と不安に充ちた稲子の氣持を紛らせるやうに、

『こゝにお前のために大層耳寄りな話があるのだよ。――こゝ云ふのは、お前も知つてゐる上伊那の北方と云ふ當節評判の金滿家な、あれの二男に房男といふ男があるのだが、嫁にもらつても可し、都合で養子になつても可し、とにかくお前と結婚をしたいと言ふのでこの間から人を以て度々申込んで來てゐるのだ。私は其の房男こいふのに逢つたこともないが、東京で法律學校にゐたこともあるさうで、一ト通り理窟も解る男だといふことだよ。』

稲子はそんな話は耳へも入らなかつたが、北方こいへば金はあるが、人からは餘り好感をもたれてゐないことも、其の二男坊が東京で散々金を浪費つたと云ふ風聞も耳にしてゐたので、何だか變な氣がした。

『私は強ち金があるから可いと云ふ譯ぢやないが、若しこの緣談が成立つとすれば、物質上で

お前は大變な幸運兒になる譯だよ。それに兎角の評判は立てるやうなものゝ、今日では以前の惡い噂も立消ゐになつて、左に右押しも押されもせぬあの地方の有力家だ。房男もそつち此方事業なぞに手を出してゐるさうで、世間が思つてゐるほどの愚かものでもないと云ふことだよお前さへ厭でなければこの緣談は直ぐにも纏まつてしまふので今が今卽決といふ譯にも行くまいけれど、まあ然うした方が、お前の生涯のために好からうこ思ふ。』

稲子は別々に考へる餘地もないことだと云ふ氣がした。やつぱり默つて俛いてゐた。

『何うだ、この頃竹村から音信があるか。』父は暫らくしてからふこ思ひ出したやうに聞いた。

『いゝゐ』こ、稲子は面を擧げて、

『私近いうちに東京へやらして戴きたうございますの。』

『東京へかい。』父は苦い顏をして、

『東京もいかゝ、その前に今の北方の話を定ては何うだい。』

『でも私欽二さんに一度お目にかゝつた上で……。』
『だが、私は欽二に逢ふ必要はないと思ふよ。』
『何うしてごぢいます。』
『欽二が迷惑に感ずるかも知れんのだよ。』
稲子は遽に顔が曇つた。何うでも欽二に第二の戀人ができたのだと云ふ氣がした。で、少し顔色を正した。
『お父さん、ごうか其の理由を仰やつて下さいまし。』
『理由を言へ？。』
『私が……二さんに逢つては可けないこ云ふ譯を言つてお聽せなすつて下さいませんか。』稲子は吃となつて言つた。
渡瀬は淺面をかきさうな顔をした。言ふに忍びなこい云ふ風であつた。
『それは言つても可いがな……然しお前が力を落すだらうと思つて……』と、渡瀬は聲を曇ま

せて、
『だが、お前が欽二を諦めると云ふなら言つても可いよ、お前は欽二を諦められるかい。何に諦められないことがある者か。現にお前には北方房男といふ、立派な婚の候補者があるのだからな。』
『お父さん、私はそのお話はお斷りしたいこ思ひます。』
『なに、お斷りだ？。』
『たこひ欽二さんに、如何なことがあらうとも、其のお話はお斷りになつて頂きます。』
『欽二が私やお前を欺いてもかい。欽二に道德上不都合があつたしてもかい。』
『それは何んなここか知りませんけれご、其のために私はあのお約束を反故にしやうこは思ひません。』
『欽二が他に女を拵へたとしたら？』
『お父さんそれは眞實ですか。』

『眞實だよ。』
渡瀬は事實を打明けた。

四

稻子は竹村の近狀について、父の言つてゐることを信じない譯ではなかつたけれど、尙恐分の疑ひはあつた。それに婿は人物本位で決めると言ひながら、人格として餘り評判の好くない北方の子息なごを、竹村の代りに撰ぶこいふのも、矛盾してゐると思つた。で、左に右竹村の樣子を探りに、東京へ出てみる必要が何うしても有るこ信じたので其の事を父に賴んだ。竹村は既業に北條の海岸を引揚げて、東京へ來てゐた。正一はこいふこ彼は北條で辰子が渡瀬に逢つたとき、當分伊豆の溫泉で保養させたいこ云ふ希望を述べて、渡瀬も餘儀なく承知したのであつた。北條に於ける渡瀬と辰子との再會には、少しばかり感情の交錯もあつたのだが、それを話する煩雜に亘るかこわざこ省いておいた。

『然しな稻子、お前が東京へ行くなら、北方の話を取決めてからにした方が可いよ、然うすればお前も竹村や辰子に對して、威張つてゐられやうこ言ふものだからな。』渡瀬は宥めるやうに言つた。

『私の考へでは、竹村がこの頃急に態度をかへたのは、房州で辰子に逢つからてだと思ふよ、女ができたと言ふのも、辰子の差金で爲た事に違ひないのだからな、私は竹村の無節操を腹立しく思ふが、それよりも竹村を自分の味方に引入れた辰子を實に憎いこ思ふよ。』渡瀬はさう言つて歎息した。

稻子は竹村に女ができたと云ふ父の辭に、ぎくりこしたが、わざと感情を壓つけるやうにして堪にてゐた。

『で、私は何うしても竹村に優つた人物を撰んで、お前に彼奴等を見返さしてやらなければ氣がすまぬのだ。お前も其の事は腹に持つてゐてくれなくてはならん。何時迄も竹村のことを思つてゐるのは、私等父子の恥辱だ。と云ふことを、特に考へてみてくれ』渡瀬は重ねて執心に說

いた、で段々聽いてゐると、正直潔白な父の苦しい氣持を解るやうで、稲子は言ふに言はれない傷ましさを感じたが、未だ全くその言を請入れる氣にはなれなかつた。それに竹村に女ができたとすると、尙々その儘に棄てゝはおけないと云ふ氣がした。それが辰子の差金だとすると一刻も早く竹村に逢つて、彼の迷ひを釋かなければならなかつた。

『お父さん、私は何うしても一度東京へやつて戴きます』稲子は惱ましげに言つたが、目には一杯涙をためてゐた。

『何うしても行く？』と、渡瀨は空虛な聲を出したが、力なげに溜息を吐いて『行つても無駄だと私は思ふがな。お父さんの言を信じないと言ふなら、それも止むを得んが、結果は大抵判つてゐるよ。絶望と悔辱とこに、お前はひどい手傷を負つて、悄々歸つて來るばかりなのだ。私は是迄健全な學窓に育つたお前をあの渦中に入れるのは如何にも忍びないと思ふから、言ふのだが、それでも行くといふなら止めはせん。』

『わたしお父さんのお言は能くわかつてをりますの。』と、稲子は襦袢の袂で涙を拭きながら、

『でも一度逢つて、欽二さんの心をよく聽いてみたうございます。』

『だが、欽二はもう以前の欽二ではないよ。あれの心にはもう取返しのつかない汚點が出來てしまつたよ。私はあゝも若いものゝ心は賴みがたいものかと實は熟々無常を感じてゐるのだ。』

『でもお父さん、それが若し一時の迷ひであつたら……』稲子は顫へるやうな聲で言つた。

悲しき旅

一

稲子が村から町へ出て、東京へ立つたのは其から二日目の晩方であつたが、此の旅し結果が何うなるか、渡瀬も氣がゝりであつたので、見送りに來た。

東京の家は此の夏疊んでしまつて來たので。今上京しても差當り竹村の宿へ着くか、でなければ別に下宿をでも捜さなければならなかつた。稲子は差當り本郷の竹村の宿で行季を解く豫定であつた。

渡瀬は裁判の方もまだ確定しないし、何かと心配が多かつた北方の緣談もそのまゝ打切つて了ふのも惜いし、それかと言つて、强つて稲子に竹村を思ひ斷らせることも出來ないと云ふ風で左右顏頭がごたゝしてゐた。

切符を賣出すには未だ間もあつたので、當分の着替を入れた行季を荷物取扱ひの口において

二人は控室でしばらく待つてゐた。稲子はお召の袷に單衣のコートを着て、手廻りのものを入れたバスケットや小さい袋などを持つてゐた。

『ぢや、まあ行つて篤と樣子を探るのだな』渡瀬は不安げな樣子で、家でも言つてゐたことを又繰返した。

『そして、是は迚も駄目だと思つたら、長居をせずに直ぐ歸つておいで。次第によつては又私が出向いても可いからまあお前が行つて見い。』

『はゝ』と、稲子は待合室の窓際に座席を取つて、物悲しげに俛いてゐた。

晝はまだ暖かつたが、山國の晩方の空氣は大分寒かつた。稲子は是迄東京の往返りには必ず此處で乘降りするのであつたが今度ほど悲しい思ひを抱いて、この停車場へ來たことは一度もなかつた。竹村に棄てられるやうなことだつたら、迚も再びこの停車場へ行つては來られないであらう。北方と結婚するなどは素より思も寄らないことであつた。

切符を賣り出したとみゝて、人々は其方へ皆集まつて行つた車夫がやがて青切符を買つて來

て、荷物も預けて呉れたところで、稲子は父と並んで待合室を出た間もなくブリッチを渡つて乗場へと急いだ。四邊にはもう電燈がついてゐた。四方に聳えた山の蒼さも薄れて、荒い風が肌にいら〳〵した。

『欽二の態度が浮いてゐるやうだつたら、見切をつけて早く歸るやうにせんけれあ不可んよ。』父はまた繰返した。

『そんな浮輩なものにりか〻つてゐるこ、お前の體までを臺なしにしまつて、今度の緣談に障碍を來さないとも限らんで、其の女に、少しでも關係が殘つてゐるやうでは、欽二に望みがないものと思つて、斷然決心すると云ふことを忘れてはならんよ。』父は乘る間際まで其れを氣にしてゐた。

『ではお父さん、これで……』汽車が動きだしたこき、稲子は窓から顏を出して言つた。

『では氣をつけてな』渡瀨も悲しげな目をして言つた。

するうち汽車が動き出した。稲子は漸と吻としたやうな氣持になれたが、同時に悲哀が胸一

杯に泌出して來て、涙がほろ〳〵こ目緣をこぼれた。

客車は身動きのならぬほどの込合であつた。そして一ト驛二ト驛過ぎるこ、枕を窓枠にあて〻仰向きに眠るものや、鞄にもたれて目を瞑つてゐる者や、今迄騷々しかつた四邊が急に靜かになつて、車輪の音ばかりが高い響を立てゝゐた。

稲子はバスケットに肱をもたせて、頭腦を休めやうこしたが着いてみる迄は眠つてもゐられないやうな氣がして、樂しいやうな哀しいやうな不安な氣持に襲はれながら、竹村こ自身の身の上を色々に想像してゐた。

二

稲子が本郷にある、竹村の宿へ着いたのは、翌日の朝の十時頃であつた。

竹村の宿は素人屋ではあつたが、以前から大學生などの世話をしてゐる家で、官…か何かの未亡人であつた。稲子は前から知つてゐる顏なので、主婦がすぐ出て來て、先づ彼女を茶の間

の方へ案内したが、然し肝腎の竹村はつい四五日前に、神田の方へ移轉したこと云ふことであつた。

主婦は五十そこ〳〵の年輩だが、髪も切つて、色氣のない、肥つた、ちよつとお品の好い女であつたが、家も下が三室に二階が二室で、小綺麗に暮したゐた。少しは財産もあるらしかつた。十八九の女中を一人つかつて、何處かの市立大學を出た、勸め人の息子と三人暮しであつた。

稲子は落膽したが、主婦は今ちよつこ竹村の居所を書つけたものが見當らないが、息子が歸りさへすれば、判るから晩方までお待ちなさいと云ふのであつた。

で、お茶をいれて、茶簞笥から菓子など出してくれて、竹村の噂をしてゐた。

『竹村さんも御病氣のために、一年お遲れなすつてお氣の毒でしたね。』

『爲方がございませんわ。』稲子は寂しい笑顔で答へたが、主婦に聞いたら竹村の近狀も略解るだらうと思つた。

『何うして引越したんでごぢいませうね』

『さあ。何か御都合がおありになるんでございませう』主婦は暗い目をして答へた。

『只今のところは、如何な家なんでせうか。下宿屋でせうか。』

『さあ、詳しい事も伺ひませんでしたが、何でも三崎町あたりの宿屋兼業の家のやうですよ。』

『さうですか』

『やつぱり素人屋では、御窮屈だと見ゐましてね。』

稲子はその上訊くのも氣恥しかつた。

『如何です、こちらへ來て少しお横におなんなさいましたら。』主婦は奥座敷の方を片附けなど稲子に言つた。

『夜汽車ではさぞお疲れでございませう。』

『有難うございます。』

『さあ何うぞ。さうしてお晝飯でもお食んなすつて、御ゆつくりなさいまし。』

稲子も茶の間にゐては邪魔だらうと思つたので、奥座敷へ入つて行つたが、横になる譯にも行かないので、バスケットの中から雜紙など出して讀んでゐた。するうち直に午になつたが、氣が落着かないので、そこ〳〵に箸をおいた。

主婦の話では、彼女の息子は欽二より二つ年下だが、幸ひと好い引緣があつて、神田の方の工科の方の學校を出ると直ぐ口があつて、この夏から京橋にある或會社へ勤め、土木の方の技師をしてゐるし、その妹も去年の春餘所へ片着いた。と云ふのであつた。殘る問題はたゞ子息に嫁をもたせる事だけで、それが巧く行けば自分も思ひ遣すことはないのださうであつた。

『ほんとうにお仕合せでございますね。』稲子はお愛想を言つたが、一家の幸福さうな空氣が、何となく羨ましく思へた。

三時頃に近所の洗湯へ行つて來てから、髪を直したり、顏を作つたり、荷物の整理をしたりなどしてゐると、直に五時六時になつた、こゝの子息の市造と云ふのが、勤め先から歸つて來た。

市造はひどくハイカラな樣子をした男で、體は小柄だが、お愛想の好い溫順しい青年であつた。稲子はその高い折襟や、赤いチクタイピンや、上へ箒のやうに押立てた、油でてか〳〵した髪などを好かなかつたが、氣質は厭ではなかつた。

三

稲子は早く竹村の居所を知りたいと思つたが、市造は『さあ、何處でしたつけ』と明白したことを言はなかつた。

で、稲子は市造の食事の濟むのを待つて、ちよつと茶の室へ顏を出して。

『あのう、私ちよつと是から竹村の宿へ參らうと思ひますが、所がお解りになりますでせうか』と訊いた。

すると市造は母と顏を見合せてゐたが、ちよつと頭を搔きながら實は竹村さんから聞いたには聞いたんですが、忘れちまつたんです。然し行つて見れば大概知れるだらうと思ひますから

何なら私がお供しませうか。』

稲子は一寸當惑した。市造の樣子が何となく不眞面目なので、少からず不安を感じたが、一刻も早く竹村に逢ひたいやうな氣がしたので、暫く考へた後、

『では、恐れ入りますが然うして戴けるでせうか。』

市造は困惑の色を浮べたが、母親も傍から勸めたので、

『では參りませう』と云つて、一緒に出ることにした。

外は大分寒かつた。角の水菓子屋の店には、柿や林檎などが綺麗に並べられて、初冬らしい都會の氣分が、何となく懷かしくも感じられた。稲子は長い間東京に居て、都會生活にも慣れて居たが、今度はまるで初めて出てでも來たやうな氣持で、淡い旅愁を唆られた。やがて二人は電車通りへ出て來た。

『好い夜ですな。』市造は不意に話しかけた。そして空を見上げた。

稲子も惹き着けられたやうに、同じく空を見上げた。

『何うです。月が好いから歩いて行かうぢやありませんか。貴女はお疲れですか。』

『いゝ、歩いても可うございますわ』稲子は應へた。

二人は又默々として歩いた。實際また好い月夜であつた。

『貴女は失禮ですが何うして東京へ入らしつたんですか。』市造は又思ひ出したやうに訊いた。

稲子は異樣に感じた。この男が何うしてこんなことを訊くのかと、いくらか腹立たしくも思つたが、それを色にも現はさず素直に答へた。

『私竹村に夏以來逢はないものですから、病氣が何うなつたかと思ひまして……それに弟も參つてゐるものですから。』

『あゝ、然うですか』と市造は恍けたやうな表情をして、

『貴女は竹村さんの近狀を御存じないんぢやないですか。』

『ね』稲子は輕い驚きの聲を發したが、胸がどきりとした。

『いや、これは飛んだことを言つたやうですね、貴女は何にも御存じないんでせうか。』

『竹村が何うかしたんでしようか。』稲子は訊いた。

市造はひどく狼狽へた樣子をして、僕はそんな積りで言ふたんぢやないんですがね。貴女のお氣に障つたら何うか赦して下さい。』

『いゝね、私何のことだか些とも解りませんの。』稲子はおづ〳〵しながら言つた。

『いや、別に何でもないんですよ、御心配のこゞやないんです』市造は事もなげに言つたが何處か奥齒に物の挾つたやうな口の利方であつた、其が一層稲子の心を苛々させた。

二人は又暫く默つて歩いた。氣がついて見ると、其處はもう春日町であつた。

市造は坂の下へ來ると、何つ方へ行かうかと思案してでもゐるやうに、暫く立止まつて居たが、其の樣子がまた稲子には此上なく不安であつた。

『まあ行つて見ませう。判らなければ判らないで、又其時の思案にするとして、捜せるだけ捜して見ませう。』

四

暫くすると、二人は水道橋を渡つて、三崎町の方へ入つて行つた、稲子は市造が連れて來てくれる以上、いくらか心當りがあるのであらうと思つて、從いて行つたが、市造は四ッ角へ來ると、何方へ行つて可いのか、然全見當が着かないやうな風であつた。

最初通りの方にある一軒の旅人宿を見つけて、其處へ入つて尋ねて見た。稲子は物陰に立つてゐたが、間もなく市造は出て來て、首を傾けながら『居ないやうですね』と言つて、そこを離れた。

『家の名を御存じないんでございますか』稲子はおづ〳〵訊いた。

『確か三崎旅館とか何とか言つたやうでしたがね。僕もこんなこゝなら、能く聞いて置くんでしたけれど、竹村さんも何だか此頃は氣がそわ〳〵してゐるやうですから、餘り明白したことを言置かなかつたんですよ。どうして又貴女の方へ御通知しなかつたんでせう。』

多分行違ひになつたんでせうゞ存じますの。若し何うしても判らないやうでしたら、田舎の方へ問合せて見ませうか知ら。』

『然しまあ、探せるだけ捜して見ませう。』

で又二人はその邊の旅館を二三軒探して見たが、何處にも居なかつた。

『可笑しいですね。』三崎町は三崎町なんですがね、それとも僕の聞き違ひかも知れませんね。』

市造はさう言つて困つたやうな表情をした。

『こんなに捜しても知れないんでございますから、迚も駄目でせう、貴方も御迷惑ですから、今夜はもう歸りませう。』稲子は力なげに言つた。

『然うですね。それでは一旦歸りませうか。』市造はさう言つて稲子の顔を見た。そして四邊を見廻しながら『何だか疲れたやうですから、何處かそこいらでコーヒーでも飲みませうか。』

稲子は『さうですね』と困惑の色を浮べたが、自分も昨夜と今夜なので、可也疲れてゐた。で市造についてつひ其近くにあつたカフエーへ入つて行つた。

この邊の店としては、可也綺麗なカフエーではあつたが、客は折ふし一人もなかつた。市造は衝立の蔭にある一つの大理石の卓子の傍へ寄つて椅子を取つた。稲子も向ひ合つて腰かけた。

『あゝ疲れた。』市造は釜形の帽子をとつて、手帕で額を拭きながら稲子の顔を見た。

稲子は思ひがけない男と、こんな所へ一緒に入つた者だと思ふと、不思議なやうな氣がして言ひ知れぬ寂しさが胸に泌出してきた。それに途々市造の言つたことが氣に懸つて、實際竹村は自分の踪跡を晦ますために、引越先をも曖昧にしたのがと思ふと、一層怨めしくも悲しくもあつた。

『貴女は何が好いですか。』市造は稲子の顔を見ながら言つたが涙含しげな彼女の目に氣が着くと、自分にも一寸沮げたやうに俛ひた。

『私何でも可うございます』稲子は微聲に答へた。

市造はコーヒーに水菓子を命じた。そして莨を喫しながら話しかけた。

『其れにしも、貴女はいくらか竹村さんのことを御存じなんでせう。』

「ね、それは知らないことございませんの。」稲子はおど〳〵答へた。

市造はうつとりとした目をして、稲子の顔を凝視めてゐた、彼はこの前にも一二度稲子を見たことはあつたが、今夜のやうに差向ひで彼女を眺めたことはなかつた。それにその頃から見ると、彼女の肉體も滅切成熟してゐた。皮膚に光澤が出てきて目にも潤ひがあつた。憂愁を含んだやうな其姿態が、殊にも美しかつた。

やがてコーヒーと水菓子が運ばれた。

熟海にて

一

其頃お信は田舍から歸つて、正一と一緒に熱海の方にゐた。實は裁判事件の爲めに、田舍へ喚戻されてゐたのであつたが、其用事もなくなつたので、又東京へ引返して來ると、辰子と入替になつて正一に附いてゐることになつた。辰子は店の方が可也忙しくなつてゐたし、沼田が淋しがるので、長く熱海にも居られなかつた。

竹村と市造との約束では、竹村が熱海に居る間に、後から市造が稲子を連れて行かうと、ふのであつたが、稲子がそんな所へは行かないと言つて肯かないので、其れを說き宥めて連出す迄には可也骨が折れた。

市造が稲子と一緒に東京驛を立つたのは、或日曜日の朝であつた。國府津へ着いたのはお晝少し前であつたが、稲子は直接熱海へ同道しやうといふので、そこで晝食を認めて、一時頃自

働車で出掛けた。

市造は稲子を宿に止めて置いて、一人で竹村の宿を訪問した竹村はちやうど正一達の部屋にゐたが、そこでは工合が悪いと思つたので、別の部屋で市造に逢ふことにしだ。

『市造といへば、貴方の以前の宿の人ぢやなくつて？』お信は不思議さうに訊いた。『あの人が此處へ何の用があつて來たんでせう。』

…村は稲子の來てゐることを餘程打明やうかと思つたが、彼女を昂奮させては大變だといふ氣がした。で、其れには返事もしないで、部屋を出て行つた。

『稲子が來ましたか。』竹村は不安の色を浮べながら訊いた。

『來るには來ましたがね、連出すまでにはなかなか骨が折れましたよ。それで今直ぐといつても氣が落着かないだらうから、今夜一晩休んで、明朝梅園の方へでも一緒に出かけることにしたら何うです。』

『いや、色々お世話でした。稲子の樣子は如何ですか。何しろ僕も自分の取るべき態度につい

て、何等の考へも纏まらないので弱つてゐるんです。謝罪をすると言つてみたところで、稲子の怒りが解ける譯のものでもないだらうし、其れかといつて今更元の道へも出られないだらうし、あの時は何だか煙に捲かれて、逢はうとは言つたやうなものゝ、變なものだね』と、竹村は嘆息するやうに言つた。

其は稲子さんだつて同じでせうが、然しあの人としては君とお信さんとの關係が、何處まで進んでゐるか、それを突止めたいので、其の樣樣によつては妥協の道を見出さうと云ふ希望もあるだらうが、何分こんなことには經驗のない處女だから、そこで僕が不肖ながら調停の勞を取る必要もあらうと云ふのだ。左に右この會見によつて、新しい道が開けてこないとも限らない。君が何處までもお信さんと別れられないと云ふのなら、其は止むを得ないけれど、君だつて正可お信さんに其ほどの執着がある譯ぢやあるまい。

もう日が暮れかゝつてゐたので、竹村は此處で晩飯を共にしようといふので、女中を呼んで酒や何かを吩咐けた。すると其處へお信も私と樣子を見に遣つて來て、市造と顏を合した。竹

村は厭な顔をしたが、默つて見て居た。
『まあ暫くでしたわね。何うして入したの？』お信は愛相らしく言つた。
『貴女等がお出になつてゐると聞いて、一日遊ぶ積りで遣つて來たんですが、貴方には飛んだ御迷惑で……。』市造もお世辭笑ひをした。
『何うしてです。賑やかで尙結構ですわ。』
そして其處へ運ばれたお膳や何かを、二人の前へ竝べて、銚子を取上げた。
『さあ、お酌を致しませうね。』お信は市造に酒を注いだ。
竹村は苦い顔をして、猪口を手にしてゐたが、稻子の事が氣にかゝつて酒も口に苦かつた。
市造は二三杯飲むと、猪口をお信に差して、銚子を取あげた。

二

一方稻子は一刻も早く竹村に逢ひたかつた。然し市造の言葉では、一應自分が樣子を見てからの事だといふので、一人宿に殘つて市造の歸りを待つてゐた然し彼は容易に歸つて來なかつた。
稻子は此間からの市造の態度について何となく不安を感じさせられた。善意に解釋すれば、彼の行動が總て自分に好意をもつてゐるやうに見ゐるのだが、然し又惡意に解釋すれば解釋出來ない事もなかつた。殊に見知らぬ土地へなぞ來て見ると。何をされるか知れないやうな氣がして、氣分が甚く警戒的になつてゐた。
するうち日が暮て來た。女中が來て、『旦那樣にまだお歸りになりませんか、御飯は如何致しませうと、訊きに來たりなどして、稻子は極まりが惡かつた。腹立しくも思つた。
で、稻子は女中の勸めで、兎に角食事をすることにしたが、給仕を爲てゐる間、氣爽な女中

はいろいろの話をした。彼女は市造を、てつきり稲子の夫と思つてゐるらしかつた。稲子もそれを心苦しく思ひながら、強いて打消さうともしなかつた。ところで、女中の話の中に、市造が出でゆく時番頭に香露館といふ旅館への道を訊いたといふのであつた。

『其では竹村はてつきり香露館といふ家に居るに違ひない。稲子は心のうちに思つた。

香露館といふのは瀬方の方ですか稲子は何氣なげに女中に訊いた。

女中の話では香露館は、直此上の方の三階建の家だといふのであつた。

飯が濟んでから、稲子は何んとなく香露館の方が氣にかゝつてならなかつた。竹村其處に居るにしても、一人ではあるまいといふ氣がした。多分お信も一緒に來てゐるに違ひないと思つた。そして然う思ふと、自分は何だか大變な處へ引張出されて來たやうに感じた。勿論東京を立つ時にも、幾らかそんな氣持はしてゐたのであつたが、今は其氣持が俄に分明したものになつて來た。其時はたゞ漠然たる想像に過なかつたが、何にしても市造の歸りの遲いのが氣にかゝつた。何か話が紛擾してゐるのであらうと思はれ

た。で、ちよつと電話でも掛けようか、それとも自身直接出かけて見やうかとも思つて見たりした。然し其も何だか力ない業のやうに躊躇された。

惱しい時間が二時間三時間と經つた。そして女中が間もなく寢床を延べに來た。

『お淋しうございませう。旦那樣は何うなすつたんでございませうね。』女中は氣毒さうに言つた。

稲子は樑つたいやうな氣がした。女中はやがて寢床を二つ竝べて敷いていつた。稲子は市造と一緒に一つ部屋で、一夜を明さなければならぬのかと思ふと堪らなく厭であつた。淋しくもあつた。お信と一緒にゐる竹村の樣子を想像すると、一層淋しく情なかつた。寧そ市造が歸つて來なければ可いと念じた。

すると間もなく廊下に足音がして、市造が歸つて來た。

『やあ、お待遠でした。淋しかつたでせう。酒なんか出されたもんですから、遂遲くなつちやつたんです。』市造は酒の機嫌で燥いでゐた。

稲子は慄然ごした。

市造は稲子の傍へ來て胡坐をかいて酒くさい息を吐きながら、

『でね、竹村君に貴女の來てゐることを話したところ、甚く驚いてゐましたよ。多分明日此方へ遣つて來るでせうよ。』

『何うも濟みません。』

『困つた事には女ご一緒なんです。が然し其れも何でもありません。』

『私の來た事を其人が知つてゐますか。』稲子は不安さうに訊た。

三

市造は胡散くさい目を睜つたが、實は彼はお信の前で稲子の來てゐることを、素破ぬいて了つたのであつた、竹村にとつては其れは大なる迷惑であつたが、市造は酒の醉に紛れて、總てを打明けて了つた。で、稲子にも其れを隱すわけにいかなかつた。

『然し此場合、お互に隱し立なんかしたつて詰りませんよ。其れよりか一切を打明て、根庭から破壞するものは破壞して了つた方が可いぢやありませんか。不可ないものは何うしても不可ないんだし、何か新しい道が開けるものなら自然に開けて來るでせうから、大膽に打突かつて見ようぢやありませんか。僕は今まで長い間お信のゐる前で、竹村君と無忌憚に話をして見たのです。』市造は豪い權幕で言つた。

稲子は自分の氣持を引搔き廻されるやうな氣がした。市造に任して置いては大變だご思つた其で竹村は何と言つてゐましたでせうか。』稲子はおづ〳〵訊いた。

『竹村君の本心が何處にあるかは、一寸解り兼ねるのですが、今更あの女と子を切るごいふことも出來ない破滅になつてゐるやうですね。』市造は嘆息するやうに言つた。

『然うですかね。』稲子は失望の色を浮べたが、

『其れでその女の方は何んな氣がしてゐるんでせうか。』

『さあ其れも何だか能く判りませんが、何うもお信の方には大した熱情があるとは思へません

ね。』市造は頸を傾げながら言つた『でお信のいふのでは早晩こんな事になるとは思つてゐた。何せ私達が末の遂げられないことは判つてゐたのです。稲子さんがお可哀相だから、今夜にでも行つて能くお話をして上げたら可いでせう、とそんなことを言つてゐるんです。然し腹は何だか判りません。竹村君も然ういはれると、それぢや然うしやうといふ譯にもいかないと見にて甚く弱つてゐたやうです。左に右あの二人は悪縁とでもいふのでせう、尋常一様の事では迚も手が切れさうも見ねませんよ。』市造は絶望的に言つた。

稲子は力なげに俛いた。涙がほろほろと眼瞼を流れた。

深い沈默が暫く續いた。

『左に右明朝此方へ遣つて來るさうですから貴女も逢つて能く話をなさい。僕も出來るだけ言つて見ませう。』

『でも、そんな工合では、逢つても駄目ですわ』稲子は涙に濡れた顔を擧げて言つた。

『そんなに悲觀したものでもありませんよ。』市造は慰めるやうに言つた。『然し貴女の體面からいへば、斷然諦めて了つた方が可いやうにも思ふのですが、貴女にはそれほどの誇矜と意氣地があるか何うか……。』

稲子は返事も出來なかつた。

『こんなことを言ふと貴女は、氣色を惡くするかも知れませんが、第三者の私から見れば、こんなにまで侮辱されても、竹村君を諦められない貴女の心弱さが、お氣の毒でならないです僕が若し貴女の兄であつたと假定すると、此場合貴女に敗けを取らしたくはないと思ひますから、潔よく別れさせて了うだらうと思ひます。實際竹村君には誠意がないんですから。』

『ね、父もそんなことを言つてくれましたの。』稲子は曇み聲で言つた。

『誰にしたつて、其は然ういふでせう。僕も最初から然う思つてゐたのですが、其でも尙一縷の望みを繋いでゐたのです。然し今夜の竹村君の態度を見ては流石の僕も絶望せずにはゐられませんでした。』

稲子は一層胸をわく〳〵させられた。自分ではまだ全く竹村に絶望する氣にはなれなかつた

が、そんなことを聞かされると、もう迚も駄目のやうに思はれて、遣瀬ない悲哀が胸に泌出して來た。

『まあ能く考へて御覽なさい。』市造は然う言つて溜息を吐いた。

四

そんな話をしてゐるうちに、もう十時になつた、この海岸にも冬は來てゐたが、東京などから見ると未だ南國らしい暖かさがあつた。殊に稲子は先刻湯からあがつて來てからは、幾分逆上氣味になつて、體が熱つてゐた。目も充血したやうになつて顏が紅かつた。それに寢床など延べた部屋の中に、若い男と差向ひで坐つてゐるのが、甚く氣窮りであつた。で、彼女は『お暑い！』と呟きながら、椽側の障子を開けて廊下へ出たが、更に硝子戸を開けて其處にあつた藤椅子に腰かけながら、外氣に肌を冷させてゐた。

外は人通りも絶ゑがちで月が朧に照してゐた。懈い波の音が物悲しげに聞へた。胖子は濕やかな外氣に觸れると、一層氣持が感傷的になつて、體の遣場もないやうな果敢ない氣分を唆られた。

稲子さん、貴女まだお寢みになりませんか。』市造も傍へ寄つて來て手摺に凭れかゝつた。

『私何だか眠れさうにもありませんから、貴女お先へ何うぞお寢みなすつて。』稲子は應へた。

『僕も今夜は何だか些とも眠くないんで。其に厭に蒸すぢやありませんか。』

『然うね、こゝは何時でもこんなに暑いんでせうか。』

『何しろ避寒地ですからね、』と市造は笑つて、少し散歩でもして見ませんか。然うしたら疲れて眠れるかも知れませんよ。』

『もう遲いんですもの。』稲子は微聲に應へた。

では何うです、何か小しばかり酒でも飲んでは。何だか寂しいやうだから、唯かうして起きてゐても詰らないぢやありませんか。僕も醉が醒めたので、妙に頭腦が滅入つて爲方がないん

です。」
『私お酒なぞ飲めやしませんわ貴君何うぞ御自由に……。』
『ぢや止めて置きませう。』市造は詰らなさうに言つた。『一人で飲んだつて爲樣がないんですからね。』
惱ましい沈默が又暫く續いた『貴女は竹村君の酒を飲むところを見たことがありますか。』
市造は思ひ出したやうに訊いた。
『いゝね。』
『竹村君はあの女と關係してから、何だか甚く人間が變つて來たやうですね。』
『然うですか。竹村がお酒を飲みますの。』稻子は竹村の事といふこと矢張聽かずには居られなかつた。
『ねゝ。飲みますこも。』市造は大業な聲で言つて。『浴びるくらゐ遣りますよ。其にお信も酒はなか〳〵強いんですからな。何でも竹村君が此頃すつかりお信に感染れて了つてゐるんです

から。今夜だつて二人で隨分飲みました。多分今頃は醉潰れてぐつすり寢込んでゐるでせう。貴女は初な處女だから、溫順しくしてゐるけれど、これが二三度男を知つた女であつてごらんなさい、この儘にしては置きませんよ。まあ、いきなり二人の寢てゐるところへ踏ん込んで行つて竹村君の胸倉を取つて、散々文句を並べるに極つてゐるんですからな。』市造は挑發的に言つて笑つた。『實際また然うでもしなければ、蟲が收まらないでせうからな。』
稻子はそんな亂暴な事をする女があるだらうかと、可笑しかつた。想像するのも厭だつた。然し市造に然う言はれると、香露館の一室に於ける二人の笑戯けてゐる光景が歷々目に見ねるやうな氣がした。今まで想像もしなかつた女の嫉妬といふものゝ惱ましさ苦しさを、今始めて强く實感し得るやうに思つた稻子の目には昂奮と惱亂の色が隱せなかつた。
『貴女は自身に嫉妬といふものを、經驗したことはないでせうが、男をとられた場合の心持が何んなに辛いものだかといふことは小說や芝居に澤山現れてゐるぢやありませんか。いくら溫順な稻子さんでも、餘り好い氣持はしないでせうからね。』

五

『ねゝ、夫はいくら神經の鈍い私でも、決して好い氣持はしませんわ。稻子は溜息を吐いた。

『戀人が他の女に行つた時、その男に一層執着が加はるといふ話ですが貴女にもそんな氣持がありはしませんか。』市造は興味ありげに訊いた。

稻子は首を傾げて思案してゐたが。

『然う、それはそんな氣もしますわ。でも何だか厭ですわ。穢らしい氣がしますわ。』

『穢ならしいんですつて？』市造は周章てたやうに言つたが、

『其は貴女が男を知らないからなんです。貴女と竹村君の關係には、今までそんな事が一度もなかつたんですか。全く潔白なんですか。』

『稻子は紅くなつた。そして返辭を躊躇した。

『だつて私達は未だ結婚前だつたんですもの。』稻子は極惡さうに呟いた。

『それが實際だとすると、竹村君があの女に溺れたのも、强ち無理はありませんね。』

『何うしてです。』稻子は詰つた。

『だつて竹村君の場合は、あの女の肉に惹着られて行つたんですから。で、またあの女には肉的に男を惹着ける魅力があるんですからな。其れが幾んど不可抗的な力を持つて、竹村君を支配してゐるんです。其氣持が僕には能く解るんです。』

『そんなに綺麗な人なんでせうか。』稻子は深い目色をして訊いた。

『然う、綺麗といへばまあ綺麗なんでせう。だが其よりも妖艶こいつた方が、適當かも知れませんね。その代り幾分下卑てゐるのは爲方がありません。』

『男の方は矢張りそんな女が好いんでせうか。』稻子は恥かしげに訊いた。

『さあ、』と市造は首を傾げたが『僕自身の趣味からいへば、餘りどつとしませんね。僕は孰かこいへばもつと落着いた溫順い、慾をいへば高尙な女が理想なんです。そして其點からいふと、お宮なごよりは貴女の方が何んなに優れてゐるか知れませんよ。』市造は熱心に言つた。

『私なぞ……。』稲子は含羞だやうに言つた。
『僕が始めて貴女を見たのは、然う、あれは何時頃でしたらうか貴女はあの時分は未だ東京へ出たてで、今よりは脊も低かつたし、何處か子供子供した可愛いお嬢さんでしたつけね。僕は驚異の目を睜つて見てゐたものです。僕に若し初戀こいふやうな氣持の經驗が、過去にあつたとすれば、其の對照は貴女であつたかも知れませんよ。今でも僕はそんな惱みから脱れることが出來ないで、實は自分一人で苦しみもし、悶へもしてゐるんです。そんな事は恐らく貴女は夢にも知らないでせう。其れを考へると僕は、寂しくて爲方がないんです。僕も苦い失戀の經を持つてゐる哀れな男の一人なんです。』市造は甚く感傷的な調子で言つた。
それは稲子に取つては、全く寢耳に水であつた。彼女は其れが市造の眞實の心の叫びであらうこは、何うしても受取れなかつたが、然し若い男からそんな甘い言葉を聞かされたのは、今夜が初めであつた。稲子は甚く困感を感じた。』
『飛んだことを言つて了ひましたね。』稲子は甚く極惡さうに、

『貴女氣を惡くしては困りますよ。』
『いゝね。』稲子は口籠つた。
夜が更けて來たので、冷い風がそよ〳〵と肌に泌みた。波の音も高く聞ゐた。
『何だか寒くなつて來ましたね戸を閉めて寢ようぢやありませんか。』市造は促した。そして硝子戸を閉めた。
『然うね。稲子も爲方なし内へ入つたが矢張り床に就く氣がしなかつたので、『私一寸お湯に入つて來ますわ。』
そして彼女は衣桁に懸かつた手拭を取らうとした時に、いきなり強い手が彼女の首を抱悚めた。熱い唇が彼女の頰に感じられた。

姉と弟

一

翌朝市造は遲くまで目が醒めなかつた。

稻子は徹夜眠られなかつたが夜明方になつてから漸く、張詰めてゐた氣がいくらか緩んで、うと〳〵と眠つたと思つたが、ふと目がさめて見るともう八時であつた。

竹村にお信が附絡つはつてゐるやうでは、迚も逢つて話をする機會もあるまいと思はれた。とすると此處に居るのも、無駄だといふ氣がした。で、市造の床を離れぬ前に、早く東京へ歸つて了ふかと思つたが、然し此儘歸るのも心殘りであつた。そしてそんな事を思ひ惱んでゐるうちに、朝飯が運ばれた。稻子は胸が一杯で、箸をとる氣もなかつた。

漸く少しばかり食べてから、ふと鶴海で名高い梅園でも觀て置かうと思つて、外出の仕度をした。その日も空は晴れてゐた。暖かい日が麗らかに照して、睡眠不足の彼女の目には目眩

しいほどであつた。

だら〳〵した坂を登つたり、溪流に架かつた橋を渡つたりして四五町も行くと、直ぐ梅園への道へ出た。稻子は惡夢に俛されてゐたやうな、昨夜一夜の苦しさを胸に浮べながら、心寂しい悲しい思ひで、獨り山道を辿つてゐた。すると直ぐ一町ほど前に、中學の制帽を冠つた十五六の少年の姿が目についた。その後姿が如何にも正一によく似てゐた。確に正一に違ひないと思つた。

『正ちやん！』稻子は懷しさうに聲をかけた。

少年は一寸振顧りさうにしたが、そのまゝ先へ行つた。

『正ちやん！』稻子は少し聲を張揚げて呼んだ。

少年は後を振顧つた。そして其が姉の稻子らしいと氣がつくと、急いで逆戻りして來た。二人は直に近づいた。

『やつぱり正ちやんだつたのね。』稻子は彼の顏を凝視めながら、嬉さうに言つた。

『僕ちつとも知らなかつた。姉さんは何時こゝへ來たの。』正一も懷しげに姉の顏をを見守つた目には涙が浮んでゐた。稻子も胸が一杯になつて、目が潤んで來た。そして我を忘れて弟の手を執りながら、

『私つひ昨日こゝへ來たのよ。正ちやんが此處へ來てゐるこゝも薄々知らないではなかつたのだけれどこんな所で逢はうとは思はなかつたわ。體は此頃何うなの。大分好くなつて？。』

『あゝもう餘程好いの。僕肥つたでせう。』正一は然う言つて顏を見せた、

『さう言へばいくらか肥つたやうだわね。やつぱりあのお信といふ人こ一緒に居るの。』稻子は不安さうに聞いた。

『あゝ、然うなんだよ。』正一は悲しげに首を垂れた。

稻子はいろ〳〵聞たい事があつたが、兎に角梅園へ行つてからにしやうこ心づいたので、

『正ちやんも梅園へ行くんでせう。其なら一緒に行きませうね。』

『ああ。』正一は頷いた。

そこから梅園までは、幾許もなかつた。彼等は直に木立の多い梅園の人口へ來てゐた。日影も洩れない繁みの間を通つて、

幾箇もの小さい橋を渡るこ、やがて無數の梅の古木が眼前に現れた。二人はその間を通つて、較高い方へこ登つて行つた。

梅林には人影も見ゐなかつた。黃ばんだ葉や紅い葉が疎らに殘つてゐて、綺麗に掃清められた芝生が、毛皮のやうに滑かであつた。小禽の聲が幽かに洩れてゐた。

『僕ね、こゝが大好なんだよ。僕寂しくなると何時でも獨りでこゝへ來るんだよ。』正一は深い梅林の中程へ何だ時、姉に話しかけた。其處からは平垣な下の平庭が一目に見下された。葺ぶきの四阿屋があつたり、危い橋が見ゐたりした。清麗な水かうね〳〵うねつて流れてゐた。

二

稻子は手帕で埃を拂ひながら正一をベンチに腰掛けさせて、自分も、その傍に掛けた。

『正ちやんは體が快くなつたから、今度私と一緒に歸りませうね。それとも正ちやんは、お母さんの傍に居た方が可くつて？。』稻子は聞いて見た。

『そんな譯ぢやないけれど、阿母さんがね、何うしても僕に置くんだつて。』正一は萎れた聲で言つた。

『でも、然うするには御父さんのお許を得なければならないでせう。』稻子は言つた。

『それはね、阿母さんの方から、御父さんに掛會つて話をつけるんだつて、阿母さんが然う言つてゐるんだよ。事によると阿母さんから田舍へ手紙を出したかも知れないよ。』正一は不安の色を浮べながら言つた。『何でも阿母さんの方では、僕を取らなくちや承知しないつて言つてゐたよ。』

『それで然うなつたら正ちやんはあの阿母さんに就く積りなの。』

『うゝん、僕は御父さんの方がいゝんだけれど、阿母さんも可哀相なんだよ。だから僕も何んだか工合が惡くて困るんだよ。あ、籍はあのまゝにして置いても、身體だけでも阿母さんの側

に居てあげやうかと思ふんだけれど、姉さんは何う思ふ？。』

『然うですね』と稻子は失望の色を浮べて、『ぢや正ちやんは姉さんも棄てゝ阿母さんの方に居たいといふの？。』

『うゝん、そんな譯ぢやないけれど、阿母さんが何うしても然うしろといふんだもの。』正一は切なげに言つた。

『正ちやんが然う思ふなら、それも爲方がないけれど、よく考へた上のことにしたら可いでせうね。それで若し阿母さんの側に居ることなると、あの西洋料理屋の子になる譯ね。』稻子は聞いた。『正ちやんは料理やなんかの子になつても可いと思ふの？。』

正一は悲しげに俯いた。

『だけれど阿母さんは、西洋料理だつて、何もそんなに可恥しい商賣ぢやないんだから、些とも厭なことはないといふんだよ。それに財産がうんとあるんだから、これから先き學問をするつたつて何んなにでも學資を掛けて貰へるといふんだよ。洋行ぐらゐはさせても可いなんて、

そんな事も言つたよ。』

『そう、そんなこと言つたの！』稲子は流石に子供だといふ氣がした。辰子に悉皆瞞されてゐるのだと思つた。勿論沼田には財産があるから、物質上では正一も可成幸福に暮すことが出來るであらうが、辰子や沼田の影響が何んな結果を、正一の頭腦に持來すか解らなかつた。然し正一と辰子の間を裂くやうなことは、滅多に言へないやうな氣がした。自分が若し男なら、此場合辰子に交渉して、正一を連れて歸ることも出來るんだが、それもちよつと出來兼ねた。

『欽二さんは何時頃熱海へ來たの。正ちやんは知つてゐるでせう。』稲子は聞いた

『欽二さんは一昨日來たの。』

『それでお信さんとい、ふ人とずつと一緒に居るの。』

『ああさうなんだよ、僕何んだかあの。』信といふ奴嫌ひだ。』正一は顔を顰めた。昨夜なんかね お客様があつて欽二さんがお酒を飲んでゐると、其處へお信も出て行つて、三人でお酒を飲んだんだよ。』

『さう！』稲子は弟の顔を見て、

『そして何うしたの？』

『それからお客の歸つてから、二人で喧嘩なんか始めたの。』

『さ、ゾ。姉さんのことを何んとか言つてやしなくて？。』

『言つてゐたやうだよ。』正一は顔を赧めた。』それから僕が夜中に目を醒すと二人でまた喧嘩をしてゐたんだよ。——姉さん、あのお信といふ女は、欽二さんの奥さんになるの？。』

三

『さうね』と、稲子は寂しく笑つて『何かそんなことを言つてゐて？。』

『何だか知らないけれど、そんなことを言つてゐたやうだよ。』正一は氣の毒さうに姉の顔を見し。

『でね。欽二さんは毎日お酒ばかり飲んでゐるんだよ。學校ももう止めるんだなんて言つてゐるよ。それもあの女が惡いんだねそれにしても欽二さんは何うしてあんな風になつちやつたんでせう、姉さんが逢つて、能く話をしないこと不可ないよ。』

『正ちやんも然う思ふ？』稲子は目に涙を浮べて、

『姉さんも然うは思つてゐるんですけれど、あの人が側についてゐるから碌碌お話も出來やしないんですもの、それに姉さんはもう默目のよ。欽二さんは私のことなんか思つてやしないんですからね。』

『ぢやね、僕欽さんに窃と然う言つてあげやうか、姉さんと二人きりで話の出來るやうにさ。』

『有難う。然う出來れば姉さんも大變可いんだけれど、お信さんが嚴重に見張つてゐるから、それも駄目でせうよ。』稲子は絶望的に言つた。

『それぢや姉さんは何うするの？』

『爲方がないから、欽二さんの目の醒めるまで待つより他はないわ。姉さんはこれでも、まだ

眞實に失望はしない積りなのよ。』

『でも欽二さんが、あの女と結婚して了へば駄目ぢやないか。』

『姉さんは欽二さんが其處まで墮落してゐるものとは思はないわ。よしまた一時同棲するにしても、迚も長持はしないだらうと思つてゐるのよ。欽二さんの後悔する時が屹度來るだらうと思ふわ。』

稲子はさも自信ありげに、氣強くは言つたものの、それはやきもき氣を揉んでくれる正一に對する氣安めで、實はそんな確信がある譯ではなかつた。のみならず彼女の心は可也絶望的氣分に包まれてゐた。欽二の愛が悉皆お信に移つて了つたやうに思へてゐた。賴りに思つてゐた市造さへ、今は却て自分に取つては、可恐しい惡魔のやうな氣がしてゐた。

二人の間に暫く沈默が續いた。

『姉さんは何時まで熱海に居るの。』正一はふと尋ねた。

『こゝでは迚も欽二さんに逢へさうもないから、今夜にでも東京へ歸らうかと思つてゐるの。

私正ちやんも連れて行きたいけれど、無斷で行つても惡いでせうし、其話をすれば、お信さんが承知しないでせうからね。』稻子は正一の氣を探るやうに言つた。

『僕も姉さんと一緒に行きたいんだけれど、僕が行つて了ふと阿母さんが淋しがるからね。』

『その事は私からも、御父さんに手紙で能くお話をするわ。姉さんも事によつたら當分東京に居るかも知れないの。然うすればまた逢ふ時もあるでせうよ。』

『姉さんは東京の何處にゐるの！。』

『今は欽二さんの以前の宿に居るんですけれど、何うせあの家にも長くは居られないから、何れ何處か他に居る所を決めなければならないでせうよ。そしたら正ちやんにお知らせするわ。そして其上で正ちやんの身の上の事も決めませうね。』

『あゝ。』正一は頷いた。

二人はベンチを離れて、徐々下の方へ降りて行つた。稻子は正一を一日でも、お信や辰子の手許に置くのが不安であつた。こゝで逢つたのを幸ひに。東京へ連れて歸りたいとは思つたが

然し正一の心が大分母の方へ傾きかけてゐることが、歴々見ゐたで、自分の居所さへ決らないのに、強いて拉れて行くのも何うかと考へた。

二人は橋を渡つたり、仄暗い木下蔭の小徑を辿つたりして、そろ〳〵出口の方へ出て來た。すると其時、向側の丘の上を行く溫袍姿の男が目についた。それが欽二だと思ふと、稻子はぴたりと足を止めて、

『あら正ちやん、欽二さんよ』と微聲に言つた

四

『僕呼んでやらう。』正一は然う言つて、

『欽二さん！』と呼んだ。

竹村は直に氣がついた。實は彼自身も稻子と逢ふ機會を、何うかして見出したいと、その事ばかり考へてゐた。市造の昨夜の態度では、稻子が既に彼の所有になつて居りはしないかと

ふ氣がした。彼は一夜眠れなかつた。然しそんなことをお信の前では嬢にも出すことは出來なかつた。お信も初めはそんなに深入りする積りではなかつた。無論幼馴染の竹村のことは絶えず頭腦にあつた。然し稲子と離れさせてまで、自分の戀を末の末まで遂げやうとは思てゐなかつたが彼女の盲目的の愛が、次第に彼女の心を男の方へ惹着けて行つた。そして日が重なるにつれて執着が深くなつた。今は竹村もそれを何うすることも出來なかつた。

竹村は直に二人の方へ遣つて來た。

『正一君だつたのか。何處へ行つたと思つたら。姉さんとこんな所にゐたんだね。』彼は微笑を浮べながら言つたが、苦惱の色は隱せなかつた。

稲子は言葉もなくて、ただ俛いてゐた。涙が自然に湧き出て來た。

『稲子さん、昨晩は失禮しました。竹村は優しい語をかけたが聲が顫へてゐた。

『いゝえ、私こそ……。』稲子も微聲で應へた。

『僕は今更になつて辯解がましい事は言ひたくはありませんが貴女は嘸怒つてゐるでせうね。』

『いゝえ、それも爲方がございませんわ。』稲子は微に應へた。

『僕も心配になつたもんですから、今ちよつと貴女の宿までお訪したところです。そしたら貴女は出掛て、市造君はまだ寢んでゐました。』

『さうですか。』稲子は初めて竹村の顔を見上げた。その目は懐しさと不安とで一杯であつた。

『あの男も、心切で來てくれたんでせうけれど、僕は何だか不安でならないんです。勿論僕自身の行爲が行爲だから、あの男を疑つたり何かするのは僭越かも知れないけれど、其にしてもあの男の態度は可怪いと思ふ。』

『いゝえ、其はそんな點もございますの。』稲子は寂しい微笑を浮べて、

『でも、あの方も私の事は心配し下さるんだらうと信じてゐますの。』

竹村は鋭い目で、ちらりと彼女の顔を見た。市造を辯護でもしてゐるやうに思はれて、不快であつた。

『其れもそうです。』竹村は氣のない返辭をしたが、更に調子を改めて、

『それで貴女は、先生から僕の事について、何かお聞きになつた事があつたでせう。先生は僕の事を怒つてお出でになるに違ひないんです。其事については僕は辯解の語もないんです僕はもう迚も、渡瀬家の相續者となる資格はありません。貴女と結婚の出來る體でもありません。先生に對しては、僕は忘恩の徒です。貴女に對しては愛を裏切つた欺瞞者です。』竹村はごこかに棄鉢氣味な口の利方をした。

稲子は何こ應へて可いか解らなかつた。で、手帕を目に當て俛いてゐた。

『それから、正一君の事も、御心配でせうが、これも僕の不束から、阿母さんの方へ當分引取られることになつたやうな譯で、僕は重ね〳〵先生や貴女に對して申譯もありません。いづれ正一君の身の上も其のうちには何こか決定するでせうが、今のこころどうにも爲樣がないです。』

稲子は竹村の態度が、甚く他人行儀になつて來たやうに感じた、取着く島もないやうに賴りなさを感じた。話したい事や聞きたい事が一杯だつたが、氣遲れがしてそれがどうしても口へ

は出なかつた。

三人は無言のまゝで、當もなしにぶら〳〵歩き出した。

五

三人は出口の方へ向いて歩いてゐたと思つたが、稲子も竹村も其儘そこを出るのは物足りなかつたので、何時とはなし足が又梅林の方へ向いてゐた。

『私この間あの人につれられて貴方のお宿を方々お捜ししました』稲子は大分たつてから、おづ〳〵前出した。

「然うですか』と、竹村は彼女の顏を見た。

「ところが何うしても知れませんでしたの。』

『然うですか。それはお氣の毒でした。して貴女は當分東京ですか。』

『それはごうなるか解りませんの。』稲子は惱ましげな表情で、

『父が早く田舎へ歸つて來るやうにこ言つてをりましたから、然う長くもゐられませんが、歸つても矢つ張詰りませんから。』

竹村は何とも應へなかつたが彼女の樣子に深い注意を拂ふことは怠らなかつた。

『貴方は學校をお止めになるとか……それは眞實のことでせうか。』稻子は訊いた。

『さうこ決つたわけでもありませんが、此頃のやうに頭腦が荒んでは論文の調べもできあがらうこ思ふし、第一先生の感情を害してしまつたから、生活費も自分で働いて取らなければならないこ云ふ譯で……。』竹村は自ら嘲るやうに笑つて、

『僕はもう迚も駄目です。』

『何故貴方は御自分で、さう何も彼もお棄てになつて了はなければならないんでせう。』稻子は悲しげな口調で言つたが、何だか出過ぎたことを言つたやうで、氣が差した。

『僕もさう思つてはゐるんです』竹村も沈んだ調子で、

『一日も早くこの咀はれた境界から脫して舊の生活に返らなければならない、體にこびりついた汚れを洗ひおとして、眞人間にならなければ駄目だ。僕は始終さう思つてゐるんです。しかし情ないことには、僕は意志が弱いかして一日こ不決斷な厭な日を送つてゐるのです。惡夢にうなされてゐるやうな日が、際限もなく續いて行くのです。それといふのも、あゝ云ふ女が附纏つてゐるからなんです、僕は今では、心からあの女を憎んでゐるのですが、然しまたあの女の立場になつてみるど、自分自身の都合ばかりも言つてゐられないやうな氣がして、良心の苛責に惱みながらも、ずるゞ〳〵引摺られてゐるんです。』

彼は述懷めいた口調で言つて嘆息した。

『大抵自分にも愛想が盡きるのです。不檢束な僕の樣子を見たら、貴女だつて愛憎が盡きたでせう。』

『いゝえ』と、稻子は微聲に應へて、『では貴方はお信さんと御結婚なさるお積りなんですか』と少し思ひ切つた態度で訊いた。

『結婚ですつて？』竹村は意外だと言ふ風をして、

『僕は初めからそんな積りはなかつたのです今だつてそんな考へはありません。然し自分の意志がさうでなくとも、ずるゞ〜引摺られて行くうちには、然うならないとも限らない。僕は何だか然ういふやうな氣がして爲方がない、それこそ呪はれたる運命です。』

『では、貴方ばやつぱりお信さんを愛してゐらつしやるのね。』稻子は怨みつぽい目をあげて彼の顏を見た。

『さう言はれても爲方がありません』竹村は嘆息するやうに呟いたが

『全然愛がなかつたのだつたら、こんな關係の生ずる理由はないかも知れません。確に或點に於てはさう言はれても仕方がありません。然しそれが僕の愛の全部ではなかつたのですあの女によつて、僕の愛が充されてゐるものとは思ひません。そこに僕の苦しみがあるのです。』

そして彼は今更のやうに稻子の顏を凝視めた。

六

竹村の然うした述懷を聞くと稻子も自分の怨みをいふよりも寧ろ彼の現在の苦しい立場に同情の念が湧いた。

『私はお信さんといふ方の事は一向存じませんが、でも其程に思つていらつしやるんですから何うかしておあげなすつたら、可いぢやございませんか。』

竹村は意外だといふ風で、彼の女の顏を凝視めた。

『僕にお信と結婚しろとでもいふんですか』竹村は反問した。

『貴方が眞實にあの方を愛していらつしやらないなら、それは爲方のないことかも知れませんけれど、若し少しでもそんなお心がお有になるなら、もつと深くあの方の愛を受入れておあげになる譯にいかないでせうか。』

『では、稻子さんはお信に同情するのですか。あの女を憎いとも思はないですか。』

竹村は重ねて訊いた。
『それあ私だつて好い氣持はしませんわ。憎いとも思ひますわでもそんな關係が生じて了つたんですもの。それは誰の罪でもございませんわ。』稻子は感傷的な調子で言つた。
『眞實に然う思つてゐますか。』竹村は聲に力を入れた。
『ね、私眞實に然う思つてゐますわ。』稻子も熱心に言つて。
『それに貴方は、私があるために、あの方の愛を充分受入れることが出來ないのかも知ませんもの。』
『無論そんな點もあります。然し僕の動機が大體間違つてゐたんです。僕は貴女こいふものを始終頭腦に持つてゐながら、或卑しい慾望に囚はれて了つたんです。そして絶ねず苦しみ悶ねながら、溺れて行つたんです。正直をいへば、僕は貴女に對するのと、然全違つた意味であの女を愛してゐるんです。』
でも、貴方が眞實にあの方を愛しておあげにならうとなされば、そこに幾らも道があるやうな氣が致しますの。貴方の愛の力で、あの方の缺陷も補へる筈だと思ひますわ。』
『だが、其は容易な問題ぢやありません。あの女の頭腦を改造するなんて、大變な事です。僕の力には迚も及びさうもありません。』竹村はさういふうちも、始終稻子の心持に不思議な疑ひを持つてゐた。稻子の氣持や言草か、餘りにも潔自だこいふ氣がした。それには彼女の愛が、既に市造の方へ移つて行つたのだらうこいふ、邪推が附絡つてゐた。
『貴女は生涯お信を見るのが、僕の責任だこでも云のですか。』竹村は暫くしてから、詰るやうに訊いた。
『いゝね、然ういふ譯ぢやございませんけれども、若し然う出來れば、貴方もあの方もどんなにかお仕合せだらうと思ひますの。』
『貴女はそれを希望しますか。』竹村は惱ましげな苦笑を浮べながら言つた。
『生意氣なことをいふやうですけれど、私あの方が何だかお氣毒のやうに思はれますから。』
『それは然うかも知れません。恐らく貴女に取つても、さうなつた方が安心かも知れないんで

す。貴女にはまた新しい愛に生きる道が、其處から生れて來るに違ひないんだからね。』竹村は皮肉さうに言つた。

稲子は驚きの目を瞬つた。竹村の意味が少しも解らなかつた彼が自分と市造との關係を、疑つてゐやうとは夢にも思はなかつた。

『もし、お氣に障つたら何うぞお許し下さいまし』

稲子はおど〳〵しながら言つた。『私そんな積りぢやございませんの。』

『で、貴女はこれからどうする積りです。』竹村は素氣もなく訊いた。

『私？。私は今自分の事について、何の考へも浮びませんの、これから寂しい長い生活が續くだらうと思つてゐます。』稲子はさう言ひながら、熱い涙がほろ〳〵と頰を流れた。

それを見ると、竹村も流石に心を衝動かさずにはゐられなかつた。

七

二人は語れば語る程心苦しさ惱ましさもごかしさが增してくるばかりであつた。以前はあれ程にもぴつたりあつて居た二人の氣持が僅か二月か三月の間合かうも齟齬ふものかと不思議に思はれた。無論お互に理解しあはうとする心がない譯はなかつた。いろ〳〵の矛盾や憧着、誤解や行違ひの底には、永久の愛が流れてゐる筈だと思はれた。二人は今熱心に探り當てやうと悶搔いてゐるのであつたが、どうしてもそれに打突かることが出來なかつた。そして何故かうも心にもない無駄口に時間を費さねばならぬのかと、自分で苛々しながらも、やつはり辭が怪しく絡れて行つた、

稲子も竹村も堪へがたい寂寥の感に襲はれながら、終に默つて了つた。

正一は先刻から、二人の話に熱心な耳を傾けてゐた。二人の話の意味が、少年の頭腦に深く解る筈もなかつたが、然しお互の氣持が、何處まで行つても解合はないのだといふことだけは

何となく彼にも感づけた。これまで姉と欽二とは曾て理屈張つた話なぞした事はなかつた。彼等は兄弟のやうな親しさで、戯悪たり燥いだりしてゐた。お信のために、それも今はかうした他人行儀な、親しみのない間になつて了つたのだと思ふと、堪まらなく情なかつた。正一の目にも、涙が光つて居た。

『そろ〳〵歸りませうか。』

竹村は促すやうに言つたが、物足りなさがまだ殘つてゐた。

『は、』稲子は無意識に應へたがあれ程語を費しながら、肝心な事は何一つ言ひもしなかつたし聞きもしなかつたやうな氣がして、この儘其處を出るのが飽足りなかつた。

二人は梅園の中を出口の方へ足を運んで行つた。すると其時入口の方から遣つて來る男女の姿がふと目についた。そして其が市造やお信だと知れると、竹村も稲子も言ひ合したやうにちよつと樹蔭の方へ身を躱さうとした。然しもう遲かつた。市造もお信も其を見脫さなかつた。そして何か私語き合ひながら傍へ寄つて來た。

『よう、朝つぱらからお揃ひでこんな處へ來て何を話して居たんです』市造は平氣らしく、其辯ひどく狼狽へた風で言つた。

竹村も顏を曇らせたが、微笑を浮べて、

『昨晩は失敬しました。今朝正一君の姿が見ないものだから此處まで搜しに來て、遂稲子さんに逢つて了つたところです。』

市造は厭な顏をした。探るやうな目で二人を眺めた。

『僕は今お信さんに寢込へ踏込まれて、君こ稲子さんこを二人で探しに來たところです。』で何か異つた話でもあつたんですか。』

『いや別に何も……。』竹村は苦笑を浮べた。

其の間稲子もお信も、手持無沙汰の姿でもぢ〳〵しながら傍に立つてゐた。

『どうです、こうして偶然に顏が合つたんだから、御婦人同士一つお昵近になつたら……。』

するとお信はつか〳〵と前へ出て、

『其が可いわ。どうせ恁うなればお互にお昵近になつて了つた方が可いわ。』
で市造が恍けたやうな眞面目なやうな態度で二人を紹介した。
稲子も爲うことなし、
『初めまして……』と、愼ましやかにお辭儀をした。
『お孃さんの事は、竹村さんから始終伺つて居りましたの。私は何も知らない、こんな不束な者でございますが、坊ちやまとはもう隨分お親しくして居りましたよ。貴女もごうぞ私共の宿へ市造さんと御一緒に、お遊びにいらして下さいましな。』
お信は顏を赤らめながら愛相よく言つた。
『は。』稲子も微聲に應へたが、かうまで人を踏みつけにして置きながら、能くもこんな白々しい口が利けたものだと不思議に思つた。

岐れ道

一

稲子が本郷の市造の家へ着いたのは、かれこれ午後の三時頃であつた。
途中彼女はいろ〳〵の事を考へさせられた。現在のこと、過去の事、それから未來の事。父の希望ごほりに行けば、竹村と結婚して、田舍に於ける父の仕事を繼承ぐ筈であつたが、それが駄目だとすると、彼女は別に自分の生きる道を新しく見出さなければならなかつた。これと云つて具體的な成案は、今ちよつと浮ばなかつたが、東京で暮したいといふ希望だけは、朧げにあつた。其に父の財政の甚く紊亂してゐることも彼女を刺戟した。このまゝ田舍へ歸つて、安閑と暮してはゐられないやうな氣かしてゐた。そして其には何か職業を選ぶ必要もあると思つたが、これといふ明白した目的も立ち兼ねた。
そんな事を考へながら家へ歸つて見ると、思ひがけない人が來て、彼女の歸りを待つてゐ

た。

市造の母親に當る宿の主婦は彼女の顔を見ると、いきなりその事を告げた。

『お國の方ですよ、北方とかいつて……。』

稲子は最初ちよつと思ひ出せなかつたが、父が此間話してゐた北方だらうといふ想像が、やがて彼女の心を脅かした。自分を貰ひたいといふ話がちよつとあつたきりで、別にさう進行してゐるものとも思へなかつたので、其當人が來てゐるといふことが、彼女にとつては意外であつた。で又何こいふ唐突なことだらうと呆れもした。

『さあ…』稲子は困惑の色を浮べた。

『何ですか、急に貴女にお目にかゝつてお話したい事がお有んなさるこかでね、一時間程前から待つていらつしやいます。昨日の晩も一寸お見にになつたんですよ。それが今日あたりは屹度お歸りになるだらうこ、私がさう申したもんですから、其れでは少し待つて見やうなんてね。』主婦はそんな話をした。

『さうですか』こ稲子は氣のない返辭をしたが、彼女は今それどころではなかつた。差當り別に宿も探さなければならなかつた。父へ昨日からの事も報告しなければならなかつた。そして自分の方針をも決めなければならなかつた。彼女は今一生涯の十字街に立つてゐるやうな氣忙しさこ不安に頭腦が動搖し混亂してゐた。そしてそこには又微な希望の光も認められるのであつた。で、この場合北方などには逢ひたいこも思はなかつたし、また必要もなかつた。

主婦はそんなことゝも知らなかつた。そして稲子が躊躇してゐるのを不思議に思つた。

『お二階の六疊にお待たせして置きましたがね、貴女がお歸りになつたら、直ぐ知らすやうにと仰しやつてでしたから、ちよつこさう言ひませう。』

稲子は其を拒むことも出來なつた。

『私會つて可いか何だか別らないんですけれ……ご』と、稲子は悒々してゐた。

すると其時茶室の次にある段梯子を降りて來る足音がして、年頃二十二三の、風彩のちよつと立派な大きな男が茶室へ顔を出した。

主婦はその顏を見ると、急に愛相笑をして、
『今お歸りになりましてですよ。』
稻子は一寸その男の顏を見たが、どんな態度を執つて好いか解らなかつた。
『はあ、さうですか。』其男は大樣な口の利方で、ぢろりと彼女の顏を見た。
稻子は體を悚めて硬くなつてゐたが、考へて見ると何處かで見たことがあるやうな氣がした別に交際のある間ではなかつたが土地の名望家の子だけに顏は誰にも知られてゐた。稻子は溫泉場か何かで、一度くらゐは見たことのある顏だといふ氣した。
男はりうとした身裝をしてゐたが、其處へ坐つて初體面の口誼を簡單に述べた。
『突然で、甚だ失禮ですが、東京へ來ましたから、一寸お目にかゝつて置かうと思ひまして……』彼は言つた。

二

稻子が極惡さうに躊躇してゐると、北方は更に、
『それで失禮ですが、貴女は當分こゝにおいでの積ですか。』
『いゝえ。』
『では貴女は何の邊に、宿をお決めになる積りですか。』北方は又訊いた。
『少しも見當がついて居りませんの。』稻子は應へたが、自分自身にも其れは差當つての困難であつた。
『何んな處が好いんですか。』北方は又訊いた。
『其れもまだ考へては居りませんの。』
北方は少し考へてゐたが、
『その事も若しお心持が惡くなかつたら、私に考へさしてくれませんか。今私の居る所は駿河

臺の方ですが、割合に靜かな所ですから、何なら彼處へいらしても可いですし、宿屋がお厭なら他に適當な場所を捜させても可いです。』

『いゝね、それにも及びません。』

『其の點は御遠慮なく、ごうぞ腹藏なく仰しやつて下さい。』

『有難うございます。』

『もう飯時かと思ひますが、どうです何處かで御一緒に何か食べながらお話をするこいふことにしては……。』

『は』こ、稻子は困惑の色を浮べて、氣が進まないらしい樣子をした。

北方には微妙な稻子の氣分なごの解りやう筈もなかつた。一圖に含羞んで居るのと思つて、強いて彼女を連出した。

『この事はお父さんの御諒解を得てゐるのですから、ごうか私を御信用なすつて……』北方は躊躇してゐる稻子に重ねて言つた。

間もなく二人は外へ出た。稻子は何だか氣の毒のやうな感じがしたが、然し彼女としては思ひも掛けない事であつた。そして結婚する意志もないのに、そんな問題に引入れられるのは、此上もない苦痛であつたが、てきぱき斷ることも出來なかつた。

北方は何處か靜かに話の出來る場所をこ、其選定に頭腦を惱ましてゐるらしかつたが、通りにある或自働車やの前へ來ると急に立止つて稻子は振顧つた。

『自働車で行きませう。』

そして稻子が困つてゐるとも知らず自働車を一臺用意させた。自働車は直に往來へ引出された。稻子は爲方なし乘るこことになつた。

自働車の中では何の話もなかつた。稻子は氣窮りな思ひをしながら硬くなつてゐたが、昨日からの事件を考へるこ、何だか夢でも見てゐるやうな氣持であつた。一體どんな運命が自分を導かうこしてゐるのか。自分の體はごんな風に決着するのか、少しも見當が着かなかつた。

『貴女は何がお好きですか。』北方はそんなことを訊き出した。

『何ですか……。』稲子は返辭に困つた。

『日本料理は如何です。それだゝ此頃發見した好い家があるのですが……。』北方は獨言のやうに言つた。

稲子は心弱くも北方に連出されて來たものゝ、此の男も市造のやうな横暴を仕向けるのではないかゝ思ふゝ、自分の輕卒が悔ひられて心が不安に封された。神經が絶にずおぢ〳〵してゐた。

自働車は神田の太通りを走つてゐたゝ思つたが、伺時か日本橋の方へ出てゐた。町はもう暮れて電燈が闇の花のやうに咲いてゐた、橋を渡ると直ぐ北方は、運轉手に何か呟いたが、間もなく自働車は只有る横町へ曲つた。そして二三間行くと、ちよつとした意氣な造りの家の前に止つた。質素な身裝をした女中が現れて、二人を二階へ案内した。六疊ばかりの靜かな小室へ二人は落着いた。そして黒塗の餉臺の前に差向ひに坐つた。

『こゝは藝者なぞ拔きで、食物本意だ客を呼んでゐるんです。』

彼は稲子にさう言つて、女中に何か吩咐た。

三

『まあ當分御一緒に少し遊びなせう。芝居なども見たり、旅行もしたり、暢氣に遣りませう。』北方は急に打寛いだ氣分になりながら、

『實は貴女には竹村ゝかいふ許婚同樣の方もあつたさうで、その方に裏切られたためにお父さんは甚く悲觀されてゐたやうです、それで其問題で貴女が御上京なすつたといふ事で、その結果も大抵解つてゐやうから、どうか逢つたら直接に能く話をして見てくれゝいふ御依頼でした。』

稲子は膝の上に白い躾やかな兩手を重ねて、默つてゐた、北方の目には、さうした處女らしい愼ましやかな樣子が、何ゝなく可憐しく見ゐた。彼は今まで多くの女に接したが、それは總て賣色の徒であつた。

『其で貴女は、竹村君にもうお逢ひでしたか。』
『は、ちよつと……。』と稲子は悲しげに言つた。
『で、どんな風でした。』
『竹村が熱海へ参つてゐたものですから、ちよつと行つて見ましたけれど、女がついてゐるものですから、話も出來ませんでした。』
『それで貴女の御考へはどうなんですか。』
北方は優しく訊いた。
『やはり竹村君を取返さうといふお積りですか。』
『出來ることならさうしたいと思つて居りますが、其れも當分駄目でせうと存じますが。』
そんな話をしてゐるこころへ吸物や刺身のやうなものが運ばれた。銚子猪口も前に置かれた。
『如何です。』

女中は北方に注いでから、稲子に注がうとした。稲子は猪口を取上げやうともしなかつたが北方に勸められて漸と手にした。
『お父さんのお考へでは、竹村はもう悉皆墮落して了つたから誰が何と言つても結婚の約束は破棄するといふお話でしたが……。』
北方は手帕で口の邊を拭きながら言つた。
『今の有樣ではさうするより他ないかも知れませんの。』
稲子は漸と顔を上げた。
『で貴女は竹村君が、今に目がさめるだらうから、其時を待つて約束を履行しやうといふお考へなのですか。』
『まあ然うなんでございます。』
『竹村君が何時まで經つても、其女と手が切ない場合には？。』
北方は稲子の顏を凝視めた。

『其時は爲方がございません。』
『僕と結婚しても可いこいふお考へですか。』
『その事は未だ何とも考へて居りません。』
『其もさうですな。』北方はそれで話を途切らせて、箸を執り上げた。
女中が次ぎ〳〵にお料理を持込んで來た。稻子も勸められて箸を執るには執つたが、食べる氣もしなかつた。北方は皿から皿へと手をつけてゐたが、酒も可成飲んだ。肉付の好い白い顏が、櫻色に美しく染られた。目も輝いてゐた。
『どうです、一つおあけになつては。私一人で飲んでゐても詰りません。貴女は氣分でも惡いのではありませんか。』
彼はさう言つて彼女の顏を眺めた。
『いゝゑ別に……。』
稻子は微聲で應へたが、頭は可也惱亂してゐた。

『竹村君の事も御心配でせう。お察しします。然しそのために病氣にでもなつては、お父さんがお氣毒です。聞けばお父さんにも同じやうな事件があつたさうですね。』
『は』と、稻子は口のうちで應へたが、父の事件に對しては、彼女も自分以上の恥辱を感じてゐた。
『重ね重ねの御不幸でしたね。』北方は慰めるやうに言つて、
『然しそんなことばかりもありません。惡い事の後には、好い事が廻つて來るものです。貴女も何時までも竹村君の事で頭腦を惱ましてゐるよりか、寧そ思ひ切つて氣分を轉換なすつたらごうですな。』

四

『有難うございますこと。』稻子は愼ましやかに應へたが、彼女にとつては、總てが以外な事ばかりであつた。人の噂に聞いたところでは、北方は品性から言つても、人格から見ても、爲樣

のないやくざ者のやうに云はれてゐるのだが、實際逢つたこころでは、そんな風も見ゐなかつた。無論不品行な點は事實に違ひないとは思へたが、それも世間一船の無自覺な放蕩息とは一つにならないやうに思へた。左に右彼はさう下卑た男ではなかつた。自分をも理解してくれさうに思へた。語にも同情があると感じた。で彼女は自然に頭腦が下がつたのであつた。父が新に彼を婚に擇んだのも、さう無定見な所業ではなかつたと考へた。

然し其にしても、北方と結婚といふ事になれば、それは又重大な問題であつた。

『無論私の方の話は、貴女の心が悉皆竹村君から離れて了つた時のことです　或は永久にそんな時は來ないかも知れません。すれば私の問題も自然消滅する譯で、それも貴女の御都合なら止を得ません。北方は極度の寛大を示して、さう言つた。

其程の寛容が、實際北方にあるのか、それともそんな風に言つて相手の心を囚へやうとするのか、それは稻子にもちよいと解り兼ねたが、この場合正直に解釋するより他なかつた。

『ごうなりますか、私には薩張解りませんのですけれど……。』稻子は淋しい笑顔をあげて、

『竹村の心持も、まだ眞實に解て居りませんのですから。』

『それは然うでせうとも。』と北方は頷いて、

『貴女としては大切な問題です。私とても横合から出て、無理に貴女を浚つて行くやうな、無法な眞似はしたくはありません。加之私は寧ろ進んで貴女のために骨を折りたいくらゐにも思つてゐるんです。』

稻子は驚きの目を睜つて、彼の顏を見た。

『竹村君がその女と、綺麗に手が切れて、貴女の懷へ還つて來るやうなら、それに越したことはないのですからな。私としても貴女のためには其れを希望します。』

稻子は他人の、而も結婚問題の始まつてゐる北方から、こんなにも親切な語をかけられやうこは夢にも思はなかつた。彼は氣持が何處まで寛いか解らない氣がした。

『有難うございます。』稻子い涙含しい氣持で應へた。

『もう迚も駄目だこは思つて居りますが、私としましては此の儘に思ひ切つて了ふことも出來

兼ねますものですから、機會があつたら、もう一度逢つて能く話して見たいと思つて居ります。』

北方も頷いて、

『それはさうなすつた方が宜しいでせう。何も輕卒に棄てゝ了ふ必要はありません。お父さんのお話では、竹村は迚も駄目だから、若し貴女に逢つたら、能く話をしてくれといふ事でしたが、竹村君の方が先決問題ですから、順序として其方から決めてかゝるのが當然です。其點に就ては、貴女も遠慮のないこころを言つて下さい。こんなことは能く決めて置かなければ、後で破綻が生じてもお互の迷惑になるばかりですからな。』

『眞實なんでございます。そんなお話ですと、私も大變に心持が好いのでございます。眞實に勝手な事を申して濟みませんですけれど……。』

『いや、少しも勝手な事はありません。貴女のお心持は能く解りました。僕も滿足です。で、僕は當分貴女の友人として立ちたいと思ひます。それだけは貴女も肯いて下さるでせうね。』

『は、有難うございます。私はお禮の申しやうもございません。』稲子は目を潤ませた。

北方は酒を切上げて、やがて飯に取かゝつた。稲子も自由な氣持で、箸を取ることが出來た

救ひ

一

稲子はその晩、直ぐにも宿を換へやうこ思つて、途中いろ〳〵心當りの家を考へて見たが、安心してゐられるやうな家は思ひ當らなかつた。

辛ひなことには、其晩市造は歸つて來なかつた。で明日にでもなつたら、宿を探しに出る積りで、十時頃に疲れた體を臥床に横へた。

習朝目の醒めたのは八時過ぎであつたが、髪を結つたり、御飯を食べたりしてゐるこ、もう十時頃になつた。風邪の心地で頭腦が痛かつたが、引越は焦眉の急だつたので、やがて外出の仕度をした。すると其處へ市造が歸つて來た。そしていきなり彼女の部屋へ遣つて來た。

『どうしました。何處へ行くんです。』彼はあはたゞしく聞いた。

稲子はぎよつとした。何か悪いこころを見つけられでもしたやうに。

『私ちよつと用足に參ります。』稲子は用心深い態度で答へた。

間もなく彼女は外へ出た。そして何處ぞ素人屋の好い家が見つかるまでの假の足止まりとして、下宿を一軒決めて來た。それがもう午後の二時過ぎであつた。そして其家も竹村が以前暫く居たことのある湯島の方の下宿であつた。

この引越しには市速が急度故障を言ひ立てるに違ひないと思はれた。市造の歸らぬうちに早くして了はうと思つたのであつたが、それが思ふやうにいかなかつた。で、ごういふ風に話をして彼處を逃げ出したものだらうかこ、稲子は途々頭腦を苦しめた。然し別に好い智恵も出なかた。で上野公園を一廻りして三時半頃に歸つて來た。

市造が果して頑張つてゐた。稲子は手荷物があつたので、俥を一臺途中から傭つて來てゐたで、部屋へ入つて女中を呼んで、

『これから引越さうと思ひますから、ごうぞ御勘定を……』と吩咐けるこ、女中は下へ降りて行つたか、間もなく市造が顔色をかへて上つて來た。

『勘定なんが入りませんよ。』彼は笑ひながら言つた。
『貴女引越すんですつて！。』
稲子はどぎまぎしながら、
『色々御世話樣でした。少し都合もございますから、お暇しやうと思ひます。ごうぞお書附を……。』
『貴女は怒つてゐるんですか。』市造はにや〳〵しながら言つた。
『そんな譯ぢやございませんの』と、稲子もお愛相笑ひを目元に浮べて。
『竹村に誤解されても困りますから、一旦他へ出やうと思つて、今部屋を決めて參りましたから。』
『竹村君が誤解するんですつて？』市造は櫟つたいやうな微笑を浮べながら。
『そんなことはありませんよ。昨夜も二人で國府津まで來て、彼處で一泊したものでしたものですから、色々貴女の事に就て意見を交換しました處、竹村君の希望では當分僕に保護を賴む

といふことでした。さういはれて見ると、僕も責任を感じますから、貴女は是非此處に居て貰はなくちやなりません。』市造は熱心に言つた。
『それは有難いんでございますけれど、もう部屋も決めて來たことですから。』稲子は少し強い調子になつて
『眞實に大變御厄介かけて濟みませんでしたわ。』
市造は評輕な目をして、ちよつと頭を搔いた。
「さう言はれると、僕も極りが惡いんです。僕も心から後悔してゐます。あの時何うしてあんな馬鹿な眞似をしたらうかと、不思議でならないんです。僕にも案外間抜けた馬鹿げたところがあるんですね。』
稲子は可笑しくなつた。
『でも私の引越すのは、其ためぢやございませんのですから、どうぞ惡くお取りなさらないやうにお願しますわ。』

『ぢやどうしても、此處には居ないこいふんですね。』市造は少し可怕い顔になつて、
『それぢや爲方がありません。貴女は貴女で自由に行動なさい。然し引越先だけは聞いて置きませう。僕は竹村君に誓つた事もありますから。

二

稲子は何うしても、所を言はうこしなかつた。市造は又どうしてもそれを聞かうこした。二人は終ひ顔色を變へて。言ひ爭つた。
『ぢや貴女は、此事に就いて僕を除外しやうこするんですか。』市造は詰つた。
『いゝわ、そんな譯ぢやございませんけれど……いづれ眞實に決まれば、其時はお知らせするかも知れませんけれど、今はほんの假に決めたばかりなんですから』稲子も負けてはゐなかつた。
『それに此事は私の自由なんですもの。貴方に御親切があるなら、私の意志くらゐは少しは尊

重して戴かなくちやなりませんわ。決して貴方を避ける積りぢやないんでございますから。』
『さうは言つても、貴女は明かに僕を拒否してゐるんです。貴女はあの一事でもつて、僕全體を否定しやうとしてゐるんです。』市造ば嵩にかゝつて執念深く言つた。
稲子も餘り強い事は言へなかつた。こんな執念深い男のこだから、何をするか解らなかつた。竹村と自分の間に、どんな小刀細工をするかも知れないこ思はれた。彼を遣り込めるのは譯もないことではあつたが、それは今に限つたこでもないと考へた。で彼女は手帕で涙を拭きながら、強いて笑顔を作つた。
『そんな譯ぢやございませんわ。彼の時の事は、彼の場きりの事だこ思つて居りますわ。私何までもその事ばかり思つてやしませんわ。其に貴方の御親切も充分感謝して居りますの。』
：子は較哀願的に言つた。
『それは此場きりの貴女の遁辭といふものです。貴女の心持は、僕には充分解つてゐます。少しでも僕に好意があるなら、行先を明すくらゐの事は何でもないぢやありませんか。僕は其れ

を聞かないうちは、一歩も此處から貴女を出すことは出來ません。』市造は意地惡く言募つた。

稻子は腹も立つたが、悲しくもあつた。何の理由があつて、市造などにこんなに窘められなければならないのかと情なかつた。口惜し涙がほろ〳〵と流れた。

惱ましい沈默が暫く續いた。稻子は後の事は又其の時の思案として、兎に角一刻も早く市造の目から脫れたいと、心が焦燥つた。彼の顏を見るのも厭だつた。彼の聲を聞くのも體が慄へるやうであつた。彼の形相が惡魔のやうに思はれた。

『では、これだけは言つても可いだらうと思ひますわ。』稻子は大分經つてから出した。

『私、家の名も番地も聞いて來ませんでしたけれど、たしか湯島四丁目だつだらうと思ひます。』

『さうですか。』市造は少し顏色が和らいで來た。

『それだけ伺つて置けば、僕も安心です。で貴女はどうしても其處へ越すといふんですね。それでは、まあ貴女の意志に任すことにして置きませう。』

漸と話が決着したところで、市造は下へ降りて行つた。

稻子は獨りになると、急に又悲しく口惜しくなつて、其處へ突伏して咽び泣いた。

間もなく彼女は荷物を持出して、俥に乘つた。俥が市造の視界を離れると、彼女は漸と狼の口を脫れたやうな心安さを感じて、俥のうへで吻とした。

湯島の宿は、ちよつと人目に觸れないやうな靜かな場所にあつた。小さいながらに綺麗な家で、部屋數も五つ六つしかなかつたが、でも市造から脫れたと思ふと心が暢々した。窓には碧桐の枯れ枯れになつた枝が蔓つてゐた。そしてその稍の間から蒼々した大空が限りなく見上げられた。稻子は安らかな隱れ場所へ落付いたやうな氣持で、暫らく窓際に坐つて、ゐたが一昨日から今日へかけての出來事が、活動寫眞か何かのやうに振顧へられた。

其日も暮れた。靜かな寂しい夜が稻子には來た。

三

稲子は竹村の處へ、自分の居所を知らして遣りたいと思つたが、其も市造の手を經なければ駄目なので、新橋の辰子のこころへでも聞合さうかとも思つたが、それも何だか氣が進まないので思案にくれてゐた。

ただ一つの頼みは、まだ熱海に居る筈の正一と、聯絡を取つて置くことであつた。さうすれば竹村の居所も自然何時かは判るであらうと思はれた。で、彼女は東京へ出てからのことを、一通り父へ報告すると共に、正一へも手紙を書いた。それと同時に彼女の氣分もいくらか落着いた。

或る日の晩方友達を訪問して宿へ歸つて來ると市造が會社の歸りだと言つて遣つて來た。稲子は彼の名を聞くさへふる〳〵厭であつたが、逢はない譯にもいかなかつた。稲子は晴着のまゝで彼を迎へた。

『お出掛ですか。』市造は訊いた。

出掛けるのだといへば市造が附いて來るだらうし、歸つたのだといへば、何時までも坐り込んで話をするだらうし、孰にしても助からないと思つた。

『いゝね、今歸つたばかりなんです。』稲子は投出したやうに言つた。

『此間の北方とかいふ男の所へでも行つてゐたんですか。』市造はにや〳〵しながら訊いた。

『いゝね、お友達を訪ねましたの。』

『さうですか。男ですか女ですか。』市造は揶揄面で訊いた。

『稲子は怒然こした。返辭もしなかつた。

「北方といふのは、一體貴女とどんな關係があるのですか。』市造は又少煩く訊いた。

稲子は一一返辭をするのも癪であつた。で苦い顔をして默つてゐた。

市造はふと思ひ出したやうに洋服の隠しへ手を突込んで、

『さうさう、これを忘れてゐた』と言つて、一通の手紙を出した。其は父からの音信であつ

た。

稲子は市造の前で讀むのも厭だつたが、何を言つて來たかと氣に懸つたので、少し體を斜向にして封を切つた。そしてさら〳〵こ目を通した。要件は、稲子が田舍を立つてから間もなく町で北方の子息の房雄に逢ふ機會があつたから、今度の緣談に就いて色々話したが、ちやうど房雄も上京するこいふから、稲子の事を能く賴んで置いた。竹村の方はどうせ望みは無いのだから、北方が訪ねて行つたら、逢つて能く話をして一切を任せるやうにこいふのであつた。

それで北方が、あんなに親切にしてくれたのだといふことも解つた。

『何です。お父さんから何を言つて來んです。』市造は又口を出した。

『何でもございませんの。』稲子は微聲で應へて、手紙を捲きおさめた。

『大變長いやうぢやありませんか一體どうしろといふんです。』

『其事は何にも書いてございませんの。父はもう諦めて居りますのですから。』

『何だか緣談のやうぢやありませんか。』市造は傍から手紙を覗いてゐたこ見ゐて、そんなこと

を言ひ出した。

稲子は實に煩い男だと思つた。可笑しくもあつた。

『貴女は眞實に何かに能く氣のつく方ね。稲子は輕蔑するやうに笑つた。

『私そんな女のやうな方嫌い！。』

そして彼女は顏を背向けた。

『ああ！』市造は詰らなささうに唇伸をしたが、苛々しさうに、

『どうです、御飯がまだのやうでしたら、一緒に食べに行きませんか。』

『私澤山……』稲子は腹立たしさうに言つた。

『然し稲子さん、貴女の態度は損ですよ。』市造は又眞面目になつて、

『貴女は竹村君の居所さへ知らないぢやありませんか。』

四

『知らなくても可ござんす。』稲子は素氣なく言つた。今は腹立しいよりも、笑止だといふ氣かした。北方といふ男が附いてゐると思ふと、いくらか心強くも思はれた。

市造もそんな男の來たことを、母から聞いて知つてゐたので、彼女の心持が變つて來たのではあるまいかといふ氣がした、で又彼はその男のことに就いて色々探らうとした。

『昨晩貴女は彼男と、何處へ行つたんです。一體北方とかいふ人とどんな關係があるんです。』

市造は執こく訊いた。

稲子は苦笑しながら、

『そんなことを聞いて何になさるんです。何も貴女に關係のあることぢやないんですもの。』

『僕に關係はないにしても、貴女の問題に何か關係がありさうに思はれてならないんです。僕に言へないことだとすると、猶更知りたくもなるんです。』

『それは言つても差支へはないんですけれど、いづれ竹村に逢ふ時もあるでせうから、其時お話しますわ。』

『左に右北方といふ男が、貴女の結婚問題の當事者だといふことだけは確でせう。僕の想像では彼の男は貴女を竹村君の手から自分の方へ取らうとしてゐるんでせう。それがお父さんの意志でもあるんでせう。貴女は今二つの道の岐れ目に立つてゐるといふ譯でせう。どうです僕の推測は圖星でせう。』市造はさう言つて得意さうに笑つた。

稲子は樑つたいやうな氣がしてわざと澄してゐた。

『恐らく貴女は竹村君を思ひ切れんでせう。然しあんな男、來たゝめに、貴女の氣の強くなつてゐることは僕にも解ります。北方の遣方一つでは貴女の心はどうなるか解らない。貴女自身にも解らないに違ひない。貴女は餘程毅然してゐなくちや駄目ですな。』

稲子は可笑しくなつた。何といふ小賢しい男だらうと思つた。

『眞實に貴方は聰明な方ね。』稲子は爲方なく笑つた。

『貴方の推測はみんな當つてゐますわ。それ程人のことが解る癖に、御自分の事お解りにならないのね。』

『自分の事とは？。』市造は釣込れたやうに訊た。

『御自分の事がお解りになつて居れば、この間のやうなことは苟且にも出來ない筈だと思ひますわ。』稲子は辱しめるやうに言つた。

『あれですか！』市造は頭を掻いた。

『さう貴女のやうに人の弱點を弄ぶものぢやありません貴女は案外人が悪い。』

稲子は默つて了つた。

『孰にしても、竹村君の方が先決問題ですから、今一應會見の機會を作る必要があるのです。これは眞面目な問題です。』

『それはさうですけれど、私貴方のやうな不眞面目な方に、間へ立つて戴くのは御免ですわ。貴方に若し御親切があるなら、此際手を引いて戴きたうございますの。』稲子は眞面目に言つた

『それに事によると、この事に就て北方さんのお力を借りることになるかも知れませんからさうなると尚その必要があるだらうと存じますの。』

『さうですか。』市造はちよつと凹まされた形で妙な顔をした。

『左に右貴方のお力を借りる必要が生じるまで、當分傍觀者の位地に居て戴きたうございますの。それにしましても竹村の居所ぐらゐは知つて置かなければなりませんから、其だけは教へて戴きたうございます。』

『勿論それだけの義務は僕にもあるんですからな。然しそれよりも近日竹村君を此處へ連れて來ることにしませう。』

『に、其でも可いですけれど……稲子は氣のない返辭をした。』

同棲

一

冬になつてから、竹村はお信と本郷邊に同棲してゐた、同棲と言つても、お信は最初の約束もあるので、家に居限りといふ譯ではなかつた。彼女は朝新橋のときわ亭の方へ出て行つた。そして其處で一日働いて夜の十時か十一時頃にならなければ、體が自由にならなかつた。

時間に制限のあるのが、不自由であつたが、それには色々の事情もあつた。今までにも沼田の懐ろから出た金は、決して少い額ではなかつたが、竹村と家を持つに就いても、前借といふ名義で一寸纏まつた金を出して貰つたし、竹村を醫學士にするには、後半年ばかりの學資も貰がなければならなかつた。

竹村は可成頭腦が荒んでゐた上に、女から學資を貢がれるのを餘り潔しとしなかつたので學校の方は思切つて了ふ積りであつたが、お信が承知しなかつた。もう少しの處で、學士の肩

書が取れるのに、棄て了ふのは惜しいと思つた。第一稲子に對しても其だけの事は、どうしても、自分の力で爲遂げなければ、女の意地が立たないと思つた。で、彼女は一日ときわ亭で働いて、其收入を前借の方へ入れたり、二人の生活費に當たりした。其れは餘り樂な仕事ではなかつた。竹村から言へば、然うなつては最早拔羞のならぬ深みへ引摺り込まれたやうなもので永遠にお信と離れる機會のないのが、心苦しかつたが、彼はそれを振拂ふ勇氣もなかつた。

お信は女給仕としてレストーランに働いてゐる時も、家へ歸つた時も、心に油斷がなかつたレストーランに居れば居るで、家の事が心配になつたし、歸れば歸つたで竹村の機嫌を取るのに骨が折れた。自分では出來る限りの親切を盡して、彼に奉仕してゐる積りであつたが、竹村に取つては其は隨分苦しいことであつた。

或日の晩方、お信はレストーランで市造を見た。彼は二三の友人と晩飯を食べに遣つて來たのであつたが、お信と顔が會ふと、直に稲子の話などが出た。

『君くらゐ罪の深い人はないね』市造はお信を傍へ引つけながら言つた。彼はウヰスキーを飲

んでゐた。
『ごうしてです。』などと、お信は顔を赧めた。
『どうしてもないもんぢやないか。人の大事な男を取つて置いてさ。』
『私そんな悪いことなんかしやしないわ。』お信は白を切つた。
『あれからどうしたね。竹村君には一向お目にかゝらないが、巧く遣つてゐるんだらう。』市造は恍けた顔で言つた。
『嘘よ。私知らないわ。』
『巧く言つてら。』市造は笑つて、
『畜生、到頭學士を一人墮落さして了やがつた。眞實に凄い腕だぜ。』
『墮落なぞさせやしませんよ。そんな亂次のないお信さんだと思つてゐるんですか。これでも人並に女の意氣地は持つてゐる積りなのよ。』
『ほう!。』こゝ、市造は目を圓くした。『凄まじい氣焰だな。』

傍の同勢も一度に笑つた。
『ぢや何かい、君が竹村に貢いでゝも居るといふのかい。』
『知りませんよ。』お信は強ねたやうな風をした。
『稲子さんはどうしました。』お信は少し間をおいてから訊いた。
『稲子!。』と市造は恍けた目をして、
『ごうしたかね。僕は稲子の番は止めたよ。』
『あんなことを言つて……貴方こそ油斷がならないわ。』お信は市造の顔を見た。
『何が?何が油斷がならない?。』市造は不安の色を浮べた。
『だつて貴方の樣子が、何だか胡散だつたわ。稲子さんをどうかしやうと思つたに違ひないんだわ。』

二

市造は甚くまごついた風で、

『笑談言つちや不可ない。僕のやうな品行方正な男を捉へて、失敬ぢやないか。』

『さう！惡かつたわね。』と、お信は煙草を喫しながら、

『其れなら好いけれど、私はまた貴方が稲子さんをどうかしやしないかと思つて、心配してゐたわ。』

『君ぢやあるまいし、人の有に手を出すやうな賤しい了簡を持ちませんよ。』

『それは笑談ですけれど、私これでも稲子さんのことは心配してゐるのよ。本當に濟まないと思つてゐるわ。』お信はしんみりした調子になりながら、

『あの場合のはづみで、あんな風になつて了つたんですけれど、私初めからそんな積りでなかつたのよ。』

『ぢや散々慰んでおいて、舐り粕を返してやらうといふ氣だつたんだね。』

『ちよつ、まさか！』お信ははき出すやうに呟いて、

『眞實にあの方はどうなすつたんでせうね。』

『そんなに氣になるのかい。』

『ゐ、それあ氣になるわ。竹村に對しても、濟まないと思ふわ。稲子さんが立派に片着くまでは竹村だつて氣が氣でないでせうし、私も寢醒が惡いわ。』

『へゐ、そんな人情か君にもあるこは知らなかつた。其程に思ふなら言つてやらう。稲子は此頃緣談があつてね、其男と始終往き來してゐるよ。無論どうなるか未だ明白したことは判らないが、何でも北方とか言つて、あの土地での素封家らしいよ。』

『へゐ北方ですつて？』お信は驚きの目を睜つて、

『あの家の息子さんと緣談があるんですか。』

『僕も何時ぞや、稲子と散歩をした序に、北方が逢ひたいとか云ふので、駿河臺の旅館へ一寸

寄つて、逢つて話をしたんだ。思つたより話の解る男でね、稲子のことに就いても、充分解を持つてゐるらしいんだ。』市造は眞面目に言つた。

『それあ然うですとも。あの人なら東京の學校にも居たし、散々お金も費つたんですから、話は解るに決つてゐるわ。それでどんな事になつたの。』

『其時も竹村君の話が出たがね北方自身は愛のない結婚はお互に不幸だから、其點は充分理解を得た上でなければならない。稲子が竹村に愛着があるなら、また其方の話もしなければならないから、一度竹村君に逢ひたいなんて、そんなことを言つてゐた。其には僕も介添こして附合ふ約束になつてゐるんだ。然し肝腎の竹村君の居所が判らないので、實はお信さんに逢つたら訊いて見やうこ、今夜も其目的旁遣つて來た譯さ。』市造はウキスキーのコップを取あげながら、お信の顔を見た。

『さう!』と、お信は空虛な聲で應へた。

『然し問題がお信さん自身の利害に關する事だけに、僕もちよつと困るんだ。君にそれだけの

雅量があるかどうかも疑問だし、君の手から竹村君を取返すことになれば、尙更君が困るだらうし、問題は益紛糾するばかりさ。』

お信の顔には、不安の色が隱せなかつた。市造だけならどうにでも妥協も出來やうが、北方といふ男が現れて來ては、話が大分面倒だと思はれた。稲子には同情も好意もあるが、今更竹村と別れるのは堪へ難い苦痛であつた。

『どうだね、君の考へは。』市造は促すやうに訊いた。

『さうね』こ、お信は淋しく笑つて、

『さうなるこ私も考へなくちやならないわ。今直ぐ北方さんを竹村に逢すこいふ譯にもいきませんわ。』

『勿論重大な問題さ。僕こしては此の際執ちとも言ひ兼ねるが出來るここなら稲子を北方の方へ納めたいと思ふね。』

『ね、さうなれば其に越した事はありませんけれど……。』

三

その晩歸りがけにお信は、辰子に會つて其話をした。そして竹村を北方に逢したものだらうか、其とも何處までも竹村の居所を秘して知らぬ顏をして居たものだらうかと、其事を相談して見た。

辰子は其時帳場に坐つてゐたが、お信が甚く困つてゐた樣子を見て、自分の意見を述べた。

『お前さんが何處までも竹村と添ひ遂げる積りなら、知らさない方が可いぢやないか。其れともお前さんは竹村を稻子に返して遣つても介意はないのかい。』辰子はさう言つてお信の顏を見た。

『そんな譯ぢやございませんが、北方さんが間へ入つて綺麗に話をつけて下さるやうなら、其方が却て安心だと思ひますわ、さうすれば私も公然で竹村と一緒になることが出來ますわ。あ

の人も今のやうに隱れてゐなくても可いんですからね。』

『其もさうだね。』辰子は應へた。

『實際このまゝでは、私達は世間晴れて夫婦になる譯にいかないんですもの、あの人が學士になつてから氣が變つて、私を棄て稻子さんと一緒にならないとも限らないんですからね。眞實の處あの人も、未だ氣が決つてゐないんですから、私心配でならないんですよ。』お信は心配さうに言つた。

『其もさうだけれど、北方さんに逢して、其結果が何ういふものですかね。』辰子は首を傾げながら、

『うまうまと竹村をとられて了ふうやうなことだつたら、お前こそ好い馬鹿を見る譯だからね。』

『ゐ、私それも心配ですの。』とお信は氣が揉めてならないと云ふ風で

『眞實に困つちまうわ。』

『毅然しなくちや不可ませんよ。折角此處まで漕ぎつけて、大事の竹村をとられて了ふやうなことぢや、詰らないぢやないか。ほんやりしてゐる處ぢやないよ。』

『お主婦さん、何か好い智慧はないものでせうかね。』お信は泣出しさうな顔をした。

『そんなにお困りなら、私が何こかしてあげても可いがね……まあ、先方も北方こいふ立派な男が顔を出す以上、此方も相當に話の解る人を頼んで、談判するより他ないだらうね、爲方がなければ、淺草の叔父にでも頼むか、沼田は相談するんだけれど、事に依つたら其前に私がその北方といふ人に、一度逢つて見やうかね。』辰子は突袖をしてゐながら言つた。

彼女は此處の店に坐るやうになつてから、悉皆下町風になつてゐた、顔も綺麗に磨かれて、渡瀬夫人であつた頃から見ると、滅切若やいで見ゐた。

『さうですね、然うして戴ければ、そんな結構なことはございませんわ。』お信は哀願するやうに言つた。

『それは譯のないことだがね、兎に角會つて見なければ解りませんね。』

それで今度市造が來たら、此方の都合を話して、辰子と北方と會ふ機會を作らせることにしやうこいふので、お信は安心して本郷の家へ歸つて行つた。

お信達の家は繁華な町の裏通りにあつた。

竹村は今まで友人が來てゐたとか言つて、少し疲れた顔をして彼女の歸りを待つてゐた。お信は袂から紙に袂んだ西洋菓子などを、彼の前へ出した。彼女は今日市造に會つた事などは、話してはならないこ思ひながらも、性分として思つたことを口へ出さずには居られなかつた。

竹村は市造の事を聞くと、何こなし顔色が曇つた。稲子が市造の手に移つて行つたのではあるまいかといふ疑ひは、今でも彼の頭を去らなかつた。

『何か稲子に關する話でもしやしなかつたのか。』竹村は氣遣ひに訊いた。

四

『稲子さんの事？』と、お信はぢろりと男の顔を眺めたが、

『いゝね。』

『あの女も、あれで田舎へ歸つて行つたか知ら。』竹村は傷ましげに眩いた。

『さあ、どうですかね。』

『僕は何うも、市造君があの女を何うかしてあるやうな氣がしてならないんだよまさかあの男の口に乘るやうな、稲子でもなからうと思ふが、女は弱いものだからね。』

『貴方は末だ、そんなことを氣にしてゐるんですか。』

『氣にもならうぢやないか、あの女に缺點があつて棄てたといふ譯ぢやないんだからね。稲子の事を考へると、餘り可い氣持もしないよ。』

『私だつて然うだわ。お氣の毒だと思つてゐますわ。嘸私を怨んでいらつしやるだらうと思ふ

と、何だか寢醒が悪いわ。それも私が悪いんです。私は義理知らずです。何うせ末は好い事はないと思つてゐますわ。』

竹村は其が少し氣に障つたといふ風で、

『そんな厭味は言つこなしにしやうぢやないか。悪いのはお前ばかりぢやない、大體己といふ人間が意氣地がないんだ。自分の情慾に打克力がなかつたんだ。』

すると お信も少し嶮しい表情になつて、

『それ御覽なさい、貴方は後悔してゐるんだわ。私と一緒になつて、詰らないことをしたくらゐに思つてゐるんだわ。』

『何を言つてるんだ』竹村は冷笑つて、

『お前こそ、一時の興みで此處まで深入して、今頃後悔してゐるんだらう。』

『さうかも知れないわ。貴方にはさう見ゐるでせうよ。だから私詰まらないわ。』お信は怨ずるやうにいつて、

『私一日ときは亭で働いて、家へ歸れば貴方は始終稻子さんの事ばかり思つて、鬱いでゐるんですもの、私こそ好い面の皮だわ。』

『誤解しちや困るよ、さう裏ばかり考へるから、氣が僻むんだ。己は一日こんなこころに燻つて此頃では人と交際もしないくらゐにしてゐるんだ。』

『お氣の毒さまね。私のやうなものと一緒に居たんぢや、何うせ貴方の肩身も狹いでせうよ。』

お信は潤み聲になつた。

竹村も可哀相なやうな氣が始終してゐた。彼女の恩惠を受けるのが心苦しかつた。それかと言つて、今更別れることも出來なかつた。彼は日に日にお信の愛に縛られて行つた。

『己が稻子のことを言へば、お前は直ぐ怒つて了ふけれど、それはお前の僻みだよ。お前は安心して可いんだよ。己は一生苦しみ悶へながら、お前と一緒に居ようよ。己はさう締めた。其うちには稻子の體も何とか決るだらうよ。ただね、あの市造の有にして置きたくはないんだよ。己は何ういふものかあの男が嫌ひだ、稻子をあの男が手の屆く處に置くのは、絶對に不贊

成だ。指一本でも差させたくはないんだ。』

『その事なら心配ないわ。』お信は漸と機嫌を直しながら、

『實をいへば稻子さんには、今大變好い緣談があるんですよ。それも市造さんから聞いたんですけれど、何でも相手は彼北方といふ家の息子さんなんですつて。』

『へゑ！』竹村は惡い顏をした。

お信は其處まで話すと、もう隱してはゐられなかつた、そして總ての事情を打開けて了まつた。

竹村はそれを聞くと齊しく、稻子のために祝福したやうな、それでゐて何處か飽き足りないやうな不思議な焦燥を感じた。

『其れで此事は、ときわ亭のお主婦さんにお任せしておかうと思ふんですけれど、貴方もそれは承知して下さるでせうね。北方さんなら、稻子さんも幸福だと思ひますわ。何うかそれが纏

まれば可いと思つてゐますもの。』お信は心から言つた。

一

稲子が、不思議な悪戯に興味をもつてゐる市造を避けるために、北方の勧めに従つて、彼の親分ごもいふべき或代議士の家に、體を托してから大分日が經つた。

そこは其の代議士の、東京に於ける妾宅とは言へ、田舎の本宅よりは寧ろ此方の家に、彼は多く足を止めてゐた。妾と言つても衆な夫人と言つてゐる、選擧運動などに經驗も腕もある四十ばかりの柳子といふ女が主婦で、閑寂したなかにも、可也幸福な生活を送つてゐた。

稲子は殆ど無條件で、この家に預けられてあつた。偶に來客の前へ出るくらゐのもので、これと云ふ仕事もなかつた、柳子も北方の趣意を呑込んでゐるので、北方との縁談を稲子に取持つやうな樣子もなく、總て自由に任しておくと云ふ風であつたが、然し北方のことは其れとなく蔭で賞めてゐた。

『でも此ればつかりはね、傍から押つける譯にも行かないんですからね、貴女もよく考へてお決めなさい。』柳子はそんな風に稻子に話した。

稻子は手を水に浸けるでもなく、掃除を一つさせられるでもく、晝は御馳走の食べ飽きでは絹蒲團にくるまつて寢た。來てから一週間もたゝないうちに函嶺へつれて行つてもらつたり芝居を見せられたりした。稻子はこんな事をしても可いのだらうかと云ふ氣がした。義理に絡んで、終ひに北方との結婚を斷ることも出來ないことになりはしないかと氣遣れた。それに就いても一度竹村に逢つて、早く彼の本心を突き止めたいものだと氣待遠しかつた。無論それも北方が引受けてゐたのであつた。

昨夜も北方が來て、夜おそくまで柳子や柳子の友達、良人代議士の友達の某辯護士などが集まつて花を引いてゐて、到頭夜明しをしてしまつた。嚴格な家庭や學窓に育てられて來た稻子は、こんな不眞面目な家庭の空氣が、不思議でならかつた。

『何うですね、こんな事も少しは覺ねてゐて損は有ませんよ。』

柳子は稻子が、夜食の鰻丼を女中と一緒に奥へ持運んで行つたとき、そんなことを言て笑つてゐた。

然し稻子は、何かひどく惡いことのやうに思はれて、顏を背向けて逃げるやうに部屋を出てしまつた。

『お孃さん爲方がない、世間見ずで……』と、衆が後でさう言つて笑つてゐるやうな氣がした。

今朝も柳子たちは九時過ぎまで、寢床を離れなかつた。やがて朝とも晝ともつかぬ食事が初まつて、北方が柳子と差向ひで座敷で鳥を食べてゐた。

『さあ、稻子さんも此處へおいでなさい。』柳子は稻子をも呼入れた。

稻子はうか〳〵してゐられないやうな氣がした。彼等に取つては、小勢の暮しに、稻子一人ぐらゐ入つて來たこころで、何でもなかつた。寧ろ賑やかで好かつた。しかし稻子は自分の體も決まらないで、恁うして無駄に日を送つてゐるのは、氣が氣でなかつた。

『あ、稲子さん！。』北方も其の時稲子の顔を見て思ひ出したやうに、
『貴女も毎日意屈でせう。』
『いゝね』と、稲子は莞爾笑つて、
『でも恁うして伺時までも此方の御厄介になつてゐるのも、お氣の毒でございます。』
『なあに、そんな心配はいりませんよ。』こ、柳子は打消して、ごうぞ遠慮しないで、
『いつ迄も入して下さい。折角お昵近になつたんですもの、たこひ話は何う云ふ風にならうと
末永く交際つて戴かないこ。』
『有難うございます。』
『竹村君の問題も、放抛つておく譯ぢやないんですがね、何しろ居所がわからないので、市造
君を使つて、今交渉中なんです。』北方は言つた。

二

そんな話をしてゐる處へ、沼田辰子こいふ方から、電話がかかつて來ましたこ言つて、女中
が北方に取次ぎに來た。
『へゐ』こ首を傾げながら、箸を置いて電話口へ出て行くと、竹村の話に就いて、少しお目に
かゝつて話をしたいが、これから出向いても差支はないかこいふのであつた。北方は、
『何うぞお出で下さい。お待してゐます。』こ言つて電話を切つた。
『ときわ亭のお主婦が來るさうですよ。』北方はさう言つて戻つて來た。
『では愈話が決るんですね。』柳子はさう言つて興味ありげに、北方こ稲子の顔を見比べて
ゐた。
『さあ、何ういふ話になりますかな。』と北方は不安さうな顔をして、
『ときわ亭が間へ入るやうぢや、餘り香しくもないな、まあ逢つて見なけりや解らない。稲子

さん、貴女も逢つて御覽なさい。何といふか……。』

稻子は淋しく笑つてゐた。

辰子が自働車で、業々しく乘りつけて來たのは、それから一時間ご經たないうちであつた。

北方はすぐ客間の方で彼の女に逢つた。

辰子は何か知らぴか〳〵した身裝をしてゐたが、初對面の口誼を述べるご、

『あの早速でございますが、竹村の事に就いて伺づたんですので……實はあの男の居所が知りたいとか云ふお話ださうでございますけれご、あの人はあんな意氣地のない男ですから、貴方にお目にかゝるのを、大變に臆却がつて居りますので、私にお目にかゝつて、お話を決めて來てくれと、恁う申しますので。私も謂はゞ稻子は自分の義理の娘でございますから、こんなお話は誠に困るのでございますが、まあお目にかゝつて、何ごか御相談して來ませうごいふので、實は恁うして伺つたやうな譯なんでございますの。』

そんな風に彼女はべら〳〵ご辯り出した。

『いや、それは何うもお手數で……。』ご、北方は大樣に受けて、葉卷を一本卓の上の菓卷入から摘みあて、前齒で口を嚙切ると、マッチを摺りつけた。そして靜かに煙を吐きながら、

『その事でしたら、私の方から伺ふのでしたのに……それでは竹村君が、私にお逢ひになる譯にはいかないと仰しやるので。』

『は。何うも、あんな內氣な人だものですから、とかく人樣に逢ふのが厭な方で……尤も極りも惡いんでございませう。何しろあんなやうな事情で、今の女ご手を切ることも出來ないやうな事情になつて居りますので……。』辰子は甚く恐縮したやうに婉曲に言つた。

北方はゆつたりした態度で、葉卷を熏らせながら、頷いてゐた。

『さうしますと、竹村君は其の女の方ご、これから先永く一緒に暮される譯なんですか。』北方は訊いた。

『其處か若いものゝ事ですから、先の先まで考へた上の事でもございますまいが、まあそんな事情にはなつて居るのでございます。』辰子は何處までもしなやかな調子で、